
HITOFUDA - ヒトフダ -

ずずぜぜ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HITOFUDA - ヒトフダ -

【Nコード】

N9597R

【作者名】

ずずぜ

【あらすじ】

化野は、この学校に行くしかなかった。「力」のある者や変人が集まる学校は、毎日が非日常と名づけることができた。怖いという気持ちが増幅するなかで、出会いや真実を知ることになる。自分を、知ることになる。

開始

なんだこいつ。俺の感想はそうだった。

「あの！ 好きなんです！」

目の前の少女はそう言う。わかったわかった。もう何回も聞いている。女性からの好意は単純に嬉しい。けれど、問題は時期だ俺はそれに疑問を持っている

「あ、うん。ありがとう」

そんな感じで礼を言っているが、俺は心の中で少女の印象は“変”だ。

「えっと……その……」

少女は次の言葉に迷っている様子。女に好きですって言われて、ありがとうの他に何か言う言葉があるか？俺は悪くない。付き合ってくださいって言わなかったお前が悪い。まあ、それを言ったとしても俺は、「NO」と言うのだが。

その理由はひとつ、俺は目の前の少女と会ったのは今日が初めてだからだ！なんて簡潔な答えだろう！こんな答えは完璧すぎる！今日は高校生活が始まる日！始業式なのだぞ！

「ああ……同じクラスの子ですよね？」

俺は氣遣ってみた。

「はっはあい！そうです！そうです！幕野桜美っていいですよ！おーみですよ！」

「へえ……まくの、おうみ、ですか。はじめまして、俺は化野菊也です……」

幕野桜実って、めっちゃ綺麗な名前だな。漫画に出てきそうだな。

「ああ！ すいません！そっか……あの、私、中学の時、化野君と同じクラスだったの知ってます？三年間ずっと同じだったんですが……」

「へ？」

間抜けな声が出てしまった。不覚。

「やっぱ知らないですよ！ 私影薄いから……。ぐすっ」

は？へ？はへ？いやいやいやいやいや。

そんなはずないって！俺はクラスの全員の名前を知ってたって！あんまり話してないけれど。

というか、泣くなよ……。もう意味わかんねーよ。

「ああ！ 思い出した！ 三年間ずっと同じだったなあ！ 幕野だろ？覚えてるよ」

なんて完璧な演技！完璧だ！

「へえ。合わせるタイプなんだ」

「？」

幕野桜美の態度が変わった気がする。

「残念でしたあああ！ 嘘は駄目ですよーん！」

と言った幕野桜美は制服のポケットからスイッチのようなものを出し。

押した。

「わあああああああ！」

落ちた。

「えへーん。君の優しさは伝わったよ！ けど嘘は駄目だよーん」

急に地面に大きな穴が開き、そこに俺は落ちた、高さは二メートルより少し高いくらいだ。

いわゆる“落とし穴”である。

「お前……」

なんか、意味がわからん。

なぜ、運動場の端のほうに穴が開くんだ。

なぜ、平和になるはずの始業式の下校中にこんなことになる。

なぜ、幕野桜美は俺を騙した。

それは、幕野桜美は変だからだ。

それで、幕野桜美は変だからだ。

そして、幕野桜美は変だからだ。

なんて完璧な答えだろう。

一章：「猪と鹿と？」

俺は昨日、高校1年生になった。誰でも同じことを思うかもしれないが、きつと俺は誰よりもそれを強く思っていた。“友達ができるだろうか”こんなしょぼい悩みは正直恥ずかしい。だから誰にも言っていない。言う他人もいないのだが。

だけど、昨日の出来事で思った。

「俺は友達なんていらぬ。もう誰も信じない！」と！

「ええ！ なんてえ！ 友達いらぬとか、どこの暗い子なの！」

「なんでお前は俺の家の前にいるんだ！？」

化野は少し大きな声で言った。

「だって、菊也面白いもん」

そう言つて、幕野桜美はくるっと回転してみせた。まったく答えになっていない。

只今化野は、学校に登校中である。家から学校には歩いて15分。かなり近い。どうやら変なやつに懐かれたようだった。いや、そもそも化野が行く学校に“変ではないやつがいるのだろうか”。

「あたし、菊也って呼ぶから、菊也も桜美って呼んでよー。おーみ！」

「わかったわかった。おーみ」

「はははははは！ 超無表情！」

こいつのテンションは高すぎる！ついていけない。ついていきたくない！

それにしてもこいつ……何か“力”を持っているのか……。

「菊也見てみて！ ぶっさいく猫ー！ 可愛いぞおお」

初対面なのに普通に話しかけてくるのだから、強いと認識していいのだろうかと化野は疑問に思った。

「あたし、まあまあ強いよ」

「！？」

桜美は急に歩みを止めて化野の顔を見た。そして不気味に笑った。

「はは。驚いてるねー。だって菊也警戒してるみたいだからー」
「そうですか」

化野は次にどんな行動したらいいのかがわからなかった。化野は中学のとき、井の中の蛙状態だったから、わからない。

“戦い方”なんてわからない！

「さー！ 学校遅刻しちゃうぞー！ 行くぞー！」

桜美は化野の手をとり、走った。化野は驚いた顔をした。最高にまぬけな。

化野は引かれるがままに走った。緊張の無駄使いをしたと、完璧ではない自分に呆れる。

「おはよおおおおおおおおおおお！」

教室の入り口で叫んでる桜美を無視して教室に入る。化野の席は左前の席だ。すぐに座った。

「おはよー！ 桜美ちゃん。あれ？ 前髪切った？」

教室にいた物静かそうな女が言った。絵に描いたような優しそうな顔。髪は黒く短い、ボブというものだろう。多分。白のハイソックス、きちんとした身だしなみ。男に気に入られそうである。

2人は教卓の前で話を始めた。

「そうそう！ わかる？ ぱつつんにしてみた！」

桜美は嬉しそうに完全に茶髪の髪を見せた。

てか、前髪切ったの気づかなかったぞ……昨日は下ろしていた髪がポニーテールになっていることは気づいた。結んでも髪先端が首くらいだから長いほうだ。

そーいやこいつ……昨日は学校指定のセーラー服を着ていたのに、今日は上にピンクのパーカーを着ている。怒られてもしらねーぞ……。

「桜美ちゃん、あの子と友達なの？」

物静かな女は化野のほうを見た。

「うん！ 昨日からだけどね！ 菊也っていつの！」

化野は桜美の言葉に少し違和感を感じた。

「あ。化野菊也です」

とつさに席から立ち上がり、化野は自己紹介をする。

「はじめまして。塩谷鹿乃って言います。よろしくです」

「ああ、よろしく……」

化野は、女と話すなんて久しぶりだったので緊張していた。化野は黒くて無駄にストレートな自分の髪を触って気分を落ち着かせる。

だけど……こいつだって、この学校にいるんだ。“危険な人物”かも知れない。

「大丈夫ですよ。警戒しないで」

塩谷鹿乃は笑顔でそう言った。

化野は黙っていた。驚いていたのである。

「こういう学校は初めてですよ。大丈夫。安心していいよ」

「え、いや。別に……」

そのとき。窓の外、運動場のほうで工事現場でよく聞くような、大きな音がした。それは金属と金属をぶつけたような。頭に響く音。学校中の人間が運動場に注目する。

「いやあああああああああああ！」

運動場の端にある器具倉庫が飛ぶ。これは決して、比喻表現ではない。本当に飛んでいるのだ。器具倉庫が。

「最悪うつつうつつう！」

最悪なのはこつちだ。最悪！と叫んでいる女の姿見ながら化野はそう思った。

少し赤っぽい黒髪のツインテールの女。セーラー服のリボンが宙を舞い、ギリギリまで短くしたスカートが揺れる。当然下着ははつきり見える。……白だ。なんだか罪悪感があるのは何でだろう。

「もう！ もう！ もう！ どーしよー！」

女はボコボコに穴が開いた器具倉庫を何回も殴っている。倉庫の鉄が悲鳴を上げているようだった。

おい。ちよつと待てよ。そう何回も…殴ったら…。

「え。ちよつ菊也！」

ここは2階である。高くもないが、低くもない。そこをから俺は飛び降りた。ちなみに化野は、中学の体育の成績は、五段階評価で三である。化野は自分の馬鹿な行動に呆れた。

「ぐへえっ」

できればかつこよく着地したかったが、それは叶わなくて、地面で1回転がつて、すぐに立ち上がる。そして、さっきの暴力女のもとへ。それが化野の行動だ。

女の手を掴む。

「おいお前！ やめろ！」

「はあ！？ あんた誰さ！？」

化野の足は震えていた。

「とにかく殴るのをやめろ！」

「はっはい……」

女は動きを止めた。

化野は手を離して、

「正座しなさい！」

と言った。

「へえ？ 何何？」

驚いているようだったが、そのあとすぐに女は正座をした。化野も正座した。

「えっと、俺は化野だ。そっちは……？」

「はあ……猪本萩です」

「いのもとはぎ……」

なんだか、聞いたことがある名前だった。

さきほどの行動とは違い、大人しく正座している。どうやらきちんと話せるらしい。何か失礼なこと言った気がしたが、そんなことはどうでもいい。

「あの……なんか？」

「なんで猪本さんは、あんなに暴れてたんですか？」

「今日の占いが最下位だったからです……」

え？

「え？ それでご機嫌斜めでボコボコ殴ったと……」

「はい……」

暴れていた女、猪本萩は占いの不幸な結果が嫌で暴れていたと。器具倉庫を軽々しく持ち上げた。驚くと本当に口って開くんだなと関心した化野。口が塞がらない。

「手見せなさい」

「あへ？ ……どうぞ」

「はあ……猪本さん、手すごい血だらけですよ……」

「ああ。ただのかすり傷です。大丈夫です」

「駄目です！」

化野は少し大きな声を出す。猪本は目を少しだけ大きくした。

「手怪我するだろ！ 自分を傷つけるな！女だろ」

なんてかつこいい台詞。完璧。と、化野は自分に浸る。

「ははははは！ 菊也さ、今絶対「俺かつこいい」って思ったでしよー！ はははー！」

「笑うな！」

いつの間にか後ろにいた桜美が大声で笑っている。

それに化野は怒って、桜美のポニーテールをひっぱってやった。

「ぎやははははは！ 痛い痛い！ 凶星！ ぎやははははは！」

そんな化野と桜美の行動を止めようとする塩谷鹿乃は焦っていて、塩谷を含めた俺たち3人を見ていた萩野はクスッと笑っていた。

とりあえずやつぱりここは変だ。この、ビレビラ高校は変だ。名前から変だとわかっていた。けれど俺はここに入る以外道はなかった。成績が良いとも言えないけれど、馬鹿だったわけではない。入ろうと思えば他の高校にだって入れた。けれど、嫌だった。怖かった。怖かった。いや、このビレビラ高校のほうが怖いのか？あの噂は本当なのだろうか。本当だろうが嘘だろうが怖い。どっちになったって怖い。本当だったら、“危険の塊”で、嘘だったら、“仲間はずれ”だ。どっちも怖い。

■ ■ ■

「ねえねえ、ビレ高あるじゃん？ あそこってさ、マジで超能力が使えるとか言うやつらがいるんでしょ？ マジキモいんですけど！

頭おかしいのかな？」

「よくわっかんないけどねー。いろんな噂あるよねー。放火魔がいるとかー、自殺未遂者がいっぱいいるとか、犯罪者がいるってねー。

あー。破壊魔少女は結構有名だよー」

「ああ。なんだっけ？ 猪…いのなんとかかかってやつでしょ？ あいつはマジやばいって聞いたわ！ なんだっけ、男よりも体力とか筋力とかがズバ抜けてるんでしょ？ それマジなの？」

「本当らしいよー。まー、ズバ抜けてるって言っても、重量挙げのオリンピック選手くらいだっていったわー。あたしの彼氏が」

「ええ！ あんたの彼氏って、猪なんとかかんとかの知り合いなの！？」

「同中だったらしいよー」

「マジで！」

「でもこんな高校嫌だよー。怖いっていうかさー。悪い噂しかないじゃーん」

「だよねだよー！ この前の殺人未遂もビレ高の子がやったって噂あるよね！」

「まー。ここらへんじゃ最初に疑われるのはビレ高だよー」

「もしかして、猪なんとかかんとかがやったりしてね！」

「それは聞き捨てならないなあ」

女子高生二人はずっとコンビ二の前で座りながら話していた。もう四月だけど、夜の外は寒かった。その二人の後ろから男の声がした。

「何？ あんた」

女子高生の一人が答えた。

「学校で教師をやっているものでね。もうすぐ十時だから、君達は家に帰りなさい。両親が心配してるよ。」

「あー。わかりましたー。いくよ」

「あいよ。マジうざ」

二人は立ち上がった。

「あ。それと言いたいことがあるんだ」

男はまた声をかける。女子高生は男のほうを向いた。

「僕の生徒達を悪く言うのにはちよつとムカついたよ。やめてくれるかい？君達みたいな子がいるから、ない噂が本当になってしまふんだよ。まあ、全てが嘘なわけではないけれど」

女子高生は顔を青くした。そしてコソコソと二人で話す。

「うわ、こいつビレ高の教師！？マジで！？」

「えー。怖っ。早く行こっ」

女子高生は小走りしてコンビニを去った。

「本当にムカつくよ。今まではこんなことなかったのになあ……。やっぱり今回の新生入生が特別だからかな。教師としては最悪だなあ。僕」

男はそんな独り言を言ってから路地裏の暗闇に消えた。

：「猪と鹿と？」二

始業式から、化野の不安は増えていくばかりだ。でもどうしてか、安心も増えていつている気がする。

まだ二日しか高校生活は過ぎていない。まだ始まったばかり、何がおこるかなんてわからない。わかりたくもない。

「でさー、そこで怪獣がごごーって！」

登校中に桜美に見つかってしまい、それから学校まで一緒に来た。廊下を歩きながら、桜美は昨日見た夢の話を化のに語っていた。

「へえ、すごいなあ」

「もう！ 聞いてないでしょ！」

「正解」

こんな対応だが、仲が悪いわけではない。まだ会ってから短いけど、友達のようなものができてよかったと化野は安心してた。女なのが少し嫌なところだが、わがままなんて言ってられない。桜美は化野を気に入っているみたいだし、自分のことを強いと言うやつは味方にしたいほうがいいと思った。

「おはよおおおおおおおおおおあああああああああ
！」

桜美の騒がしい朝の挨拶が教室に響く。どうやら恒例らしい。

「うつせーな！ 桜美！ 朝くらいテンション下げとけえ！」

教室の窓側にいる男が声を上げる。

「うぎゃー！ Fきゅんだー！ うきょーい！」

桜美はその男のところへ行き、嬉しそうにジャンプしていた。

「きゅん付けるのやめろ！」

「Fきゅうつうつうつうつん！」

Fきゅんと呼ばれる男は近江に怒鳴っているというのに、桜美は

キヤハキヤハと大笑いしている。化野はFきゅんってやつの気持ち
がわかる気がした。

始業式から化野の後ろの席には誰もおらず、ずっと休みだったのだ
が、Fきゅんとやらの席のようだった。化野は自分の机にスクール
バックを置いた。化野の席の後ろに座っているFきゅんってやつと
目が合った。きっとこれが不良と目があってしまったときの気持ち
なんだろうなあ。そんなことを思って、化野はカクッと小さなお辞
儀をした。

「あ？ おい桜美。こんなやつ中学んときにいたか」
どうやら化野のことらしい。

「ううん。いないよ。高校からみたい」

「え。ここって中等学校あんの？」

化野は桜美に聞いた。

「うん。この高校に来てる子のほとんどがビレビラ中学から来てる
よ。高校からの子って十人もいないくらいだったような……」

「え！ 本当かよ！」

なるほど。だからみんな仲が良さそうなのか……。

「で、お前は高校からなのか。なんか全体的に黒いな。制服に髪に
変なやつ」

Fきゅんとやらが化野をじろじろと見てきた。

「これが普通なんだよ」

見た目だけで変と言うな。お前には変とは言われたくない。女みた
いに髪が長く、完全な金髪なお前にはな。前髪で左目が見えんわ！
私服でくるな！制服着ろ！桜美もだ！

「お前は全体的に黄色いよな。なんだっけ、えふきゅんだっけ？
ん？ えふちん？」

皮肉っぽく言った。わざとだ。

「お前殴られてえーのか……」

殴るのを我慢しているようだった。少し桜美のほうを見た。

「殴りたいとこだが、殴ると桜美がうるさいんでね。見逃してやる」
「なんだそりゃ」

化野は笑いながら言った。

桜美もクスクスと笑っていた。

「えっと。俺、化野っていうんだ。よろしく」

「んあ？ 急に馴れ馴れしくなるんだなあ、お前。俺はFだ」
はてな。

「へ？ F？」

「ああ。Fだ」

「F？ エフ？ 外人さん？」

はてなばかり並べている化野に桜美が声をかけた。

「Fきゅんはね。名前隠してるの。だからFでいいんだよ。学校の
生徒登録もFで通ってるしね」

なんだよそれ……そんなんで学校来れるのかよ！

「いいのかそれ」

「別に、俺だけじゃないと思うぞ。たまにいますぞ。桜美は違っつけ
？」

「あたしは本名だよー」

偽名で学校来れるって…俺はやっぱり来る学校間違えたか？

「Fか……。なんかかつこよくてム力つくな。やっぱFきゅんで、」

「やめろ」

Fはどうかの不良みたいに俺を睨んだ。目つきが悪すぎて怖い感情以外何もない。今気づいたが、Fの額の左側に切ったのを縫ったあとがあつた。かなり大きい。左目が隠れるくらい長い前髪でわからなかった。このことには触れないことにした。

「冗談冗談。そうだな。なんか黄色っぽいし。きいろな。宜しく黄色」

「ぎゃははっはああ！ でた！ 菊也の適当！」

「お前なあ……」

「嘘嘘。宜しくF」

「おうよ。化野」

そのときチャイムがなった。始業式から、クラスの係り決めやら、委員会のことやら、他のことで急がしかったので、まだ勉強を始めていなかった。ちなみに化野はなんの係りにもならなくて済んだ。桜美は風紀委員になったようだ。

高校に入つての初めての授業の始まりだ。

■ ■ ■

「はあ……。」

「どうしたんですか。あんたらしくくないですね。ため息なんて」

二人の男が学校のどこかの一室にいた。

「昨日さ……ビレ高の悪口言ってる子を見かけてさあ……ム力つくなあ……」

機嫌悪そうにしている若い男は、黒いソファーに寝そべっていた。「なんですかそれ。あんたいつもこの学校どうでもいいって言ってたじゃないですか。学校を建設した本人なのに。校長なのに」

もう一人の男は出入り口の近くの壁に背中を預けて立っていた。

「それがさあ。今回は特別なんだよ。君が一番わかっていているだろ？」
「はいはい。わかってますよ」

「なあ。願いつて誰が叶えるんだろうな……」

ソファーに寝そべっていた男は起き上がって座った。

「願い？ 将来の夢とかですか？」

「それもあるけど、試合に勝ちたいとか、宝くじで当てたいとか」

「さあ？ 自分自身じゃないですか」

どうでもいいように答えた。

「自分で叶えるか…… そうだよな。普通はそうなんだよ。だけど、」

少しの間。

「この学校ではそんなことないよね」

チャイムが鳴った。

「では、授業行つてきますね」

「一年生の初めての授業でしょ？ 頑張つてねー！ 僕はまったり
ケーキと紅茶を頂いてるよーん」

「はいはい」

男がひとり、一室から出て行つた。

「さあーで、新生は毎年大変だからなあ……。それにあの子もいるしね……。ふふっ」

男はビレビラ高校の校長室のソファーにまた寝そべった。着ているスーツはきちんと着ていなく、まるで、校則をやぶって教師に反抗している男子高校生のようだった。

「さて、ケーキ食べよう」

：「猪と鹿と？」三

高校生になって初めての授業なのだから、楽しみと思ってもいいだろう。どうせまだ勉強はやらないはずだ。自己紹介とかで終わってしまうだろう。俺のクラスは1 - 3だ。一年生は四クラスあって、だいたい一クラスあたり三十人くらいいる。

クラスのみんなは騒がしく話していた。遊びの約束だとか、恋の話とか、おしゃれの話だとか。

やっぱり色々な人がいるなど、人間を關心している俺がいた。でも、どうやら先生についての話が多いようだ。たしかにこの学校に来てから始業式以来、先生を見ていない。始業式には教頭先生しかいなかった。いかにも教頭先生！って雰囲気の人だった。委員会決めとかは、黒板に決めておけと書いてあったので決めたのだ。廊下を歩いている先生も見ることがない。当然、見たこともないのだから名前には知らない。まさか授業にも出てこない気か？

教室の扉が開いた。古い校舎ではないので、扉はスーッと静かに開いた。その瞬間に生徒は何かに取り付かれたみたいに静かになって、一斉に前を見た。

「ん。お前、号令やれ。規律、礼、着席だ」
先生は化野を指差した。

「あつ。はい」

化野は急に言われたので驚いてしまった。

「規律」生徒が一斉に立つ。「礼」「着席」
こんなことやったことがなかったので、化野は緊張していた。

「あ。はい。俺がここの担任だから。札素火^{ふだすか}っていうんで。よろしく。漢字は札に素に火ね。燃える火ね。ちなみに偽名なんで。あ。担当教科は数学です」

なんとすばやい自己紹介なんだ。めんどくさいのが顔に出ている。名前を紹介してすぐに偽名だと言う人は初めて見た。いや、初めてではなかった。

「じゃ、授業始めるよ。今からプリント配るから、やって。まあ、小テストみたいなもんな」

教室からざわざわと声が溢れる。すぐに勉強が始まったからであろう。それに急にテストが始まったのだから、皆は憂鬱な気分だ。化野の右横の席に座る桜美は、嫌がることなくプリントを後ろの人へと渡していた。カリカリと字を書く音だけが聞こえる教室。だが、外の風の音があるから、多少話しをしてもめだたない。札素火先生はグルグルと教室中を歩いていたが、疲れたかのように教室の左前、つまり化野の席の前のほうに教師用の椅子を置いて座った。

「ふーん。結構頭良いんだな」

先生が声を吐いた。

「え」

「お前だよお前。これ結構難しい問題ばかりなんだけど、できるなんてすごいな」

どうやら化野に言った様子だった。

「あ。ありがとうございます」

化野は少し頭を下げる。

そりゃあ当然だ。中学のときは勉強しかすることなかったしな。

「はい。二十分！ 終わりー。後ろから回収ー。ちなみに百点満点で点付けて三十点以下のやつは罰でトイレ掃除な」

一番後ろの人がテストを回収し始めた。回収したテストを先生は教室の前にある教卓で整頓していた。

「どどどおおおしよおお！ あたし白紙だよ！」

桜美が横で涙目になっている。

「はあ！？ なんで白紙なんだよ！」

「わかんなかった！」

「いやでも！ 最初のほうは簡単だっただろ！」

「ええ！ 菊也って頭いいの！？ 意外！意外すぎる！」

「失礼だな」

「Fきゅーん！ Fきゅんも赤点でしょ？ ねえ」

桜美はキラキラとした目でFを見た。

「化野のテストをカンニングした俺には赤点など無縁なのだよ。あー。後ろの席で良かった」

Fは勝ち誇ったように手を組んでそう答えた。

「えー！ ずるーい！ あたしもそうすれば良かった！」

「おいお前。俺の答案をカンニングって今言ったよな。金よこせ」

「せんせーい。カツアゲされましたー」

「あ？ 先生は今忙しいんだよ……。カツアゲはFがするのが外見からして普通だろ。頑張れ」

「はーい。おら化野、金よこせ」

「意味わからん！」

きやはははと桜美が笑った。それを見て化野も笑った。

「ん。あと十五分くらいあるけど。あとは自習にするわ。チャイム鳴るまで教室でるなよー。じゃ」

先生は教室を出て行った。

「あ。俺トイレ行ってくるわ」

化野は席を立つ。

「えー。出るなって言ったじゃん」

「トイレくらいいいだろ」

Fがぼそつと呟いた。

「行ってくる」

■ ■ ■

はあ。今日の校長は実に楽しそうだったなあ。まあ、ずっと待っていたものがやってきたのだから当然か。さて、職員室行ってテストの点付けて、それからまた校長室行かないと……。いや、その前に。

「誰ですかね」

札素火の声が廊下に響いた。

「ちつ。……見つかった……」

廊下にある流し台の下から人が出てきた。まるで今から戦争に行くような、そんな格好だ。ヘルメットにガスマスク。自衛隊が来ているようながっちりした服装。右手にはライフル。

「これはこれは、面白い登場ですねー。侵入者さん」

「逃がしてはくれないのか」

「え？ 何か言った？」

二人の時間が止まったかのように、二人とも一步も動かなかった。

札素火のほうは少し笑っている。

カツッ

足音。侵入者のものではない。そして札素火のものでもない。

「え」

そこにいたのは化野菊也。侵入者の背後で立ち止まってしまっている。

「化野くっ！」

札素火がかすかに化野の名前を呟く。

「え。何。どうなってんだ」

化野菊也は硬直している様子だった。

「ははははは！」

侵入者は化野菊也にライフルを向けた。

「動くなよ。先生さんよお。動いたら生徒打つぞ」

完全に化野菊也は人質になってしまった。本人はびっくりしているようで、ぴくりとも動かない。

あーあ。化野君めっちゃ驚いてるじゃん。可愛そうに。早く助けてやらないとなあ。

札素火は妙に落ち着いてた。

「さてどうすんだい？ 先生さん。逃がしてくれるよなあ？」

「打てば」

「へ？」

「打てよ。生徒をよ。」

札素火の言葉に驚いたのか、化野が声を上げた。

「え！ ちょっと待てよ！ そりゃないだろ！」

「どうせ打てないだろ？ あんたらが生徒を打てるわけがない。この

学校の生徒をな」

それに打ったって。絶対に助かると宣言できるぞ。俺は。

「んじゃ、施錠しようか」

その言葉を札素火が吐き、右手を下から上へと上げた。

ガシャン

■ ■ ■

瞬間の出来事だった。札素火先生が施錠とかなんとか言っつて、右手を上げたときだった。早すぎて詳しくはわからない。けれどたしかにガシャンという音が聞こえて、“施錠”されたのだ。言葉に表すことができない。左右から？上下から？いや、四方八方から鎖が飛び出してきた。そして“施錠”された。この自衛隊みたいな人は“施錠”された……？。

「はい。終わり。怖い思いさせてごめんな。化野君」

「いえ……俺は大丈夫です」

先生俺の名前覚えてるのか……。あ。テストのときに見たのか。

「どうした？ 何か用あったか？」

鎖で束縛された自衛隊らしき人は気を失って倒れていた。鎖には錠前がたくさん付いていた。そういえば札素火のピアスも錠前の形をしていることの化野は気づく。

「あ。トイレで……」

「ふーん。じゃ、俺は職員室行くよ」

先生は、倒れている人に巻きついていている鎖を持って引きずりなが

ら歩きはじめた。

「あの！ 先生」

「ん？ どうした化野君」

「それが……先生の力なんですか……」

これは聞いても良いものなのか、それは化野にはわからない。

「うん。そうだよ」

「え。あ、はい」

「じゃあ」

先生はまた歩き始める。

「ちよつと待つてください！ そんなあつさりしていいんですか！？」 俺失礼なこと言ったんじゃ……」

先生はもう一度立ち止まってこちらを見た。

「失礼？ 別に失礼じゃないと思うけど……。化野君のクラスにだつていつぱいいるでしょ」

やっぱりそうなのか。力があることは、ここでは普通なのか。ああ。やばい。俺はどうやら“危険の塊”へ飛び込んでしまったようだ。ビレビラ高校は、力ある化け物が集まる場所。たつたひとつだけ設けられた居場所がここだった。ああ。こんなとこに飛び込みだなんて。

「じゃあね」

先生は職員室へ向かった。

授業の終わりの合図が廊下に響く。

ああ。怖い。怖い。怖い。

俺も怖い。

二章：「何かの花が落ちた」

札素火先生には力があつた。筋力とか、権力とかではない。魔法的な力だ。先生の力を見た後、化野はしばらく立つたまま動けなかった。恐怖に怯えていた。

怖い怖い怖い怖い怖い。それしか頭になかった。そして、そう思っている自分が嫌だった。

俺は立つたままだった。桜美とFに声をかけられて、そのときにやっと我に返った。それからはずっとボーっとしていて、まるで人形のように一日を過ごした。今日の全ての授業が終わるまでそのままだった。

「おい。化野。おい。おい」

「え。あ。何？」

Fの呼びかけに気づいたのは、生徒皆が下校している頃だった。

「何で、お前教室掃除してんだよ。テスト三十点以下じゃねーだろ」
Fは教卓の上に座っていた。

「あ、本当だ。何で掃除してんだよ俺」

「えー。赤点取ったのが、あたしだけだったから手伝ってって言っ
たじゃーん。菊也OKしたよー」

「いつのまに……！ まあいいや」

化野は掃除を続けた。

ずっと考えていた。力とは何なのか。どれだけの人間がその力を持っているのか。Fと桜美はどうなんだろう。持っていてもおかしくない。でも、その力を見せないということは、やはり力是人に見せたくないものなのだろうか。もしそうならば、容易に「見せて」

と言うことはできない。力を持つ者はクラスにいっぱいいると、札素火先生が言っていたが、誰がそれなのかがわからない。まるで、当たりの数がわからないくじ引きをしているみたいだ。いや、当たりくじがあるのかさえ、あいまいだ。

「早く行きなよっ」

「ええ。でも……」

「渡すだけじゃーん」

教室には化野とFと桜美しかいないのに、他の人の声が聞こえた。どうやら廊下からの声らしい。女三人組のようだ。

「あ！ 萩じゃん！ やっほー！」

桜美がその三人のもとへ走っていった。

「あ。桜美！ やっほー！」

「どしたの？ 萩？ 用があるの？」

それから萩と呼ばれた女は化野を見た。

ん？ 俺？ 俺に用なのか？ えっと……誰だっけ……。たしかあの子は……器具倉庫を飛ばしていた子か……猪本さんだっけ。

「俺？」

化野は自分を指で示した。

「うつつん！ えっと……その……昨日はありがと……」

最後のお礼の言葉はボソボソと言っているようで、聞きづらかった。そのあとに猪本さんは化野に小さな紙袋を渡した。いや違う、投げつけた。

猪本は顔を真っ赤にして、視線を化野から逸らしながら話した。

「あなたのおかげで爪が割れなかったし……友達できたし、色々世話になったから」

「え？ 友達……？ それは俺がやったんじゃないんじゃない？」
「世話になったの！」

猪本さんはキリつとした表情で化野を睨んだ。Fにも劣らない怖い顔だ。

「ああ。どうも……」

とりあえずお礼を言う。

「じゃー！」

「あ！ 待ってよ萩ー！」

「おいてかないでー」

猪本を含む三人組は化野の教室を去った。

「菊也ー！ 何入ってるの？ それ」

猪本から貰った小さな紙袋を指差す桜美。

「あ。えつと……クッキーかな。手作りっぽい」

「えー。いーいーなー」

女から物を貰ったのは初めてかもしれない。小学校や中学のときはめったに女と話さなかったしなあ……いや、男もだが。

「おい。早く掃除終わって帰ろうぜ。そんでどっか寄ってくぞ」

Fはそう言って教卓から降りて、スクールバックを背負った。

「寄ってくって……？」

化野は妙にその言葉に食いついた。

「いいねー。じゃあ私カラオケがいいなー」

「俺が歌を歌うと思うか？ 却下」

化野の心臓がちよっとだけうるさくなった気がする。

「じゃあボーリングでどうだ！」

「よし、それ。行くぞ。馬鹿二人」

そしてFは教室の扉へ歩いた。桜美は、自分は馬鹿じゃないとFに怒鳴っていた。

「ああ。今行く」

化野は慌ててスクールバックを持って二人を追う。その姿に少し疑問を持ったような顔をした二人。

はじめてなんだ。友達……と言って良いのかわからないけれど、友達と遊びに行くことが。はじめてなんだ。ちよつとした夢だった。友達と遊びに行ったり、一緒に昼ごはんを食べたり、笑ったり。ああ。なんだ。この学校は怖いけれど、自分も怖いけれど、Fや桜美は怖くないじゃないか。ただの馬鹿な二人なんだ。きっと怖い力だつて持っていない。きつと。

「あれれれれ？ マツチヨちゃんの匂いしたのになー。いないなあ」

いきなりだった。教室からあと一歩で出るというところで、背後から声。それはちよつとだけ幼い声で、独り言だというのに、はつきりした声だった。

「だ。誰」

後ろに振り向いた化野の素直な感想だった。姿を見て、生徒とも先生だとも思わなかったからだ。

その姿は、ふざけているのか、ただの変人なのか、職業なのかはわからない。いや、職業であつてほしい。化野の目はものすごく変なものを見ている目だった。

だつて、教室の真ん中にピエロがいるだなんて、誰だつて変だと思つたろう？

「ねえ、その黒髪の君、マツチヨちゃん知らない？ 猪本萩つていう女なんだけどさー、あたし捜してんの」

ピエロは化野に話しかけてきた。ピエロは背が小さく、中学生くらいだろうか、百五十センチあるかないくらい。あたしと自分で言っていたから女なのだろう。でもピエロのような化粧をしている

ので、外見では女か男かわからない。

「それならさつき……」

と、俺が言いかけた瞬間。

目の前にそのピエロの姿があった。

「あんたからマッチョちゃんの匂いがしたんだよねー。だけど違ってたみたいだわー」

そう言ってニヤニヤと化野を見ていた。

匂い……？こいつは匂いで人を捜しているのか？ああ、そっか、このクツキーか。猪本さんがくれたからなあ。それにしても匂いで人を捜すって、犬でも連れているのか？

「あ、はい。さつき猪本さんから貰ったんです。猪本さんなら……」

「んー？ どしたの？ 誰と話してるの……」

桜美がスキップしながら教室へ戻ってきた。だけどピエロを見た瞬間に顔色が変わった。

「あれー？ もしかして君がマッチョちゃああん？」

また瞬間の出来事だった。ものすごい速さで俺の前を人が通った。

「お……おい」

ピエロの手には短いナイフ。それもピエロのような模様だった。

ピエロは桜美の首まであと一センチというところでナイフを桜美に向けていた。

「ん？ マッチョちゃんじゃないの？ 猪本萩？」

化野はピエロの行動にも驚いていたが、それよりも桜美の表情に驚いた。桜美の表情は、誰から見ても怒っているとわかるくらいに激怒していた。

「今度は萩を狙ってんのね……出て行きなさいよ」

ナイフを向けられているのもかわらず、桜美に動揺はない様子だった。

「あは。やっと普通の反応だね。さっきの黒髪の子はあたし見ても怖がりも、怒りもしなかったしねえ」

「出てけ」

「うるさいね。死にな。」

ピエロはナイフを持った腕を上げて、振り落とした。

桜美が消えた。横へ逃げたわけではない。本当にいないのだ。化野も目を丸くしていたが、ピエロのほうも驚いた様子だった。

「こつちだよ。エセピエロ。」

桜美の声だ。その声は化野の後ろから聞こえる。

「え！ 桜美！ なんでこつちに！？」

「きやは」

桜美は先ほどとは違い、ニコニコと笑っていた。手にはたくさんのボタンが並んだりリモコンを持って。

「んー？ 君も力持ってるのー？ でも今はマツチヨちゃんにしか興味ないのよねー」

死ね！と大声を出したピエロは化野と桜美のほうへ走ってきた。逃げることもできないくらいに速い動き。逃げなくてはいけないのに、化野はそれができずにいた。速さに負けているのも理由のひとつだが、もうひとつだけ俺には理由があった。桜美に力があるのかという疑問だ。

ドスッと鈍い音が響き、ピエロが倒れた。今見ている世界が変だった。まだ俺は地球にいるのだろうか。本当にここは今までいた俺の

世界なのか。ドスつと音を出したのは、上から落ちた大きな石がピエロにぶつかった音だった。ここは教室だ。なのに、上から石が落ちてきた。

「私の友達を傷つけんなよ。調子乗るな。帰れ。出て行け。」

これは本当に桜美なのか？口調だって違うじゃないか。いつものように馬鹿っぽく話さないのか？

「んあ？ こいつは初めて見るなあ。新入りか？ 残念だなあ。この生徒を甘くみるなよ？」

廊下から顔を出したFが笑いながらピエロに話しかけた。

「お前さ、今桜美の手の上なんだぜ？ 桜美の学校で自由になれると思うなよ？」

ピエロは黙ったままだった。

「どういうことだよ……」

桜美はさつきから変な行動をしているようだし、その行動を見ているFは慣れたようにピエロに言葉を吐いている。置いてかれているのは俺だけなのか？俺だけ何も知らないのか？力？能力？ピエロ？ナイフ石Fデイク世界桜美地球タタカイ

「はははははは！」

ピエロが急に笑いだした。今まで考え事をしていた化野は驚いて体を揺らした。

「馬鹿か！ あたしは君らを足止めしてただけなんだよ！ めんどくさそうな女がいたもんでねえ、あたし一人で来てないよ？ 目的はマツチヨちゅん！ 十人くらいで狙ったからね、今ごろ捕まってるんじゃない？」

ピエロの目的は拉致なのか？ただ猪本さんに会いたいとかじゃなく、拉致のために捜していたのか。

さきほどの自分の行動を思い出す化野。親切に猪本の情報を与えようと自分が恥ずかしかった。きつとまだ学校を出ていないはず、俺と話したあとにすぐ帰っていたら、まだ運動場あたりだ。

化野はすぐに窓へ向かった。石の下敷きになっているピエロを飛び越して、動揺もしない桜美とFの表情を無視して。化野は窓を開けて運動場を見た。勢いあまって、窓から落ちそうになった。

「馬鹿なのはエセピエロだよ。萩を拉致するために十人送ったとか言ってたけど、少なすぎるよ」

化野は運動場を見た。そこにはたくさんの人々の姿があった。三人の女子高生の姿と、スーツの人がたくさん。

「馬鹿はあなたたち。私たちは天才なの」

そこには。運動場には。三人の女子高生が立っていて。スーツの人は全員倒れていた。

「萩の筋力上昇の力が簡単敗れるわけじゃないじゃん。ばかちゃん」

猪本は何事もなかったかのように、三人で校門をくぐり、学校を出て行った。化野は運動場を見たまま固まっただけで、桜美が言っていた言葉と運動場の風景を結び合わせた。

筋力上昇、たしかに初めて猪本さんを見たときは、器具倉庫を飛ばしていた。ただの怪力なんだと、思っていたが、今見ている風景を見るかぎり、スーツの人たちは短時間であるようにされたのだ。戦って、猪本さんが勝ったのだ。あんなどこにでもいそうな女の子が、自分より大きいであろう人を相手に。

寒気。力があるものがこの学校に集まると聞いたが、こんなにも簡単に見つかるものなのか。俺がクツキーを貰った子も、担任も、ま

だ高校一年生が始まったばかりなのに、二人も力があるものに出会ってしまった。魔法みたいなものとか、漫画や小説の世界にあるような出来事が自分目の前で起こっている。嬉しくない。ワクワクしない。怖い。怖い。怖い怖い怖い。

「菊也？ 大丈夫？ 顔色悪いよ？ 調子悪いなら帰ったほうが…」

桜美が心配そうに化野を見た。

「あ……。うん。俺帰るわ……。ごめん。」

化野は少し速めに歩いて教室を出た。桜美も、力を持っているのかもしれない。それが怖かった。

桜美とFが、不思議そうな、悲しそうな顔で化野を見ていたことを化野は知らなかった。

■ ■ ■

「覗き見ですか。悪趣味ですね」

校長室に入ってきた男、札素火が声を吐いた。

「あはは、そんな言い方 नाही でよー。侵入者いたみたいだったけど、萩ちゃんと桜美ちゃんが追いついてくれたよ」

校長室にある棚の上にパソコンが置いてあり、それを校長が見ていた。

「猪本と幕野ですか。あの子たちはベテランですからね」

そう言いながら、札素火はソファに座った。

「桜美ちゃんのところにF君と菊也君がいてさ、二人は戦えないからちょっと心配だったんだけど、

桜美ちゃんを甘く見てたみたい。もうこの学校は改造済みのようだよ。きつと監視カメラにも気づいてる」

校長はニコニコ笑いながらパソコンを閉じ、札素火の対面にあるソファに座った。

「あ。間違えた。戦えないではなくて、戦わないだったよ」

「そんなこと、どうでもいいですよ。……そういえば、今日俺の力見ましたよ。化野君」

「ああ。それもあるのか」

校長は爪を少し噛んで、考えはじめた。

「どうしたんです？」

「さつき菊也君の様子が変だったから。まだこの学校に慣れてないみたいだし、びっくりしてるのかな？」

「たしかに、力について少し食いついてました。力があることを聞くのが失礼だと思ってるみたいです」

そうか。と一言呟いて、校長は立ち上がり、自分の机の上にある大きなものを持ち上げた。

「ねえ。見て見て！ 新しいの買ったんだー。去年は兎だったでしょ？ 今年はパンダにしてみたんだー」

「はあ……また、きぐるみ買ったんですか……。ピンクのパンダなんて目に悪いですね。なんか目も怖いし」

校長は札素火の後ろへ行き、トンつと頭にチョップした。

「パンダを悪く言うな！ 君もきぐるみを使用したほうがいいんじゃない？ 目つきが悪いのが隠れるよ。ふだすかちゃん！」

遠慮しますと言って、立ち上がった札素火は書類のようなものを校長の机に置き、校長室の扉を開けた。

「ちなみにパンダの色は七色あるんだぞー！ 毎日変えるんだーい！」

「はいはい」

札素火は校長室を出た。

「さて、そろそろこのパンダの仕事があるかな」

パンダのきぐるみをソファーに置いた。

「いいなあ。力。僕も欲しいなあ」

校長はソファーに寝そべった。その拍子にパンダのきぐるみが地面へ落ちる。校長が横目でパンダを見た。

「パンダなんてどうでもいいよ」

校長は眠りについた。

：「何かの花が落ちた」二

一日だけ学校を休んだ。本当に気分が悪かったので、ずっと寝ていた。さすがに二日休むのはやめた。

一日休んだ昨日、俺はゆっくり考えていた。ゆっくり考えることは良いことだ。今考えると、桜美が力を持っていたって、桜美は普段使わなかった。だから危険ではないではないか。それに俺のこと友達と言ってくれているのだから、俺は安全じゃないか。そんなことを思いながら朝早くに登校していた。自分は最悪なやつだなとも思っている。

「おはよー！ 菊也！ 気分は大丈夫？ もう元気？」

会うかもしれないと思っていたので、桜美が後ろから肩を急に叩いても驚かなかった。桜美と一緒にFもいたのは予想外だったけど、とくに驚かない。

「あ、ああ。大丈夫」

普通にしようとしても、やっぱり表情には出るもので。

「化野。お前さ、なんかあんだろ。悩みごととか」

「えー！ Fきゅんが人の心配するとかキモい！ 変！」

「キモいだと……お前……」

「はは。大丈夫大丈夫。そんなもんじゃないよ」

二人はいつもどおりだった。Fが俺の心情に気づきつつあるけれど。

学校の生活はまだ慣れていない。慣れていないが、生活していくのに苦痛はない。ただ、怖いものはあるけれど。なんとなく、桜美を避けてしまっていることに化野は気づいていた。登校あとも、授業中も、桜美とは目を合わせなかった。化野と桜美の変な雰囲気を、

Fはずっと見ていた。

「やつほーい！ ごはんだー食べよー！ Fきゅん、菊也！ あ、鹿乃も一緒に食べよーよ」

桜美は昼になるとすぐにスクールバックから弁当を出した。桜美の呼びかけに塩谷鹿乃は桜美の机の横に椅子を持ってきて、弁当を机に置いた。右隣には桜美の席、後ろにはFの席があるので、化野が動く必要はなかった。

「あ。あのさ。俺ちよつと用があつて……」

「え？ 菊也一緒に食べようよ……」

一瞬だけ桜美と目があった。すぐに逸らしたけれど。

「おい。化野……お前やつば変だぞ。てか、そろそろ殴るぞ。うぜえ」

「ちよ、F君。落ち着いて！」

「塩谷は黙ってるよ」

「ほんと、ごめん！」

化野は席を立った。そのとき、化野の呼び出しが放送で流れた。校長室に来いと。

「じ、じゃあ」

立ち去るのに良い理由ができたので、呼び出しの放送を嬉しく思った。そして少し走って教室を出た。

そのあと、桜美は化野が出て行った扉をずっと見て固まっていた。Fは買ったパンを食べ始めていた。

「ねえ、私。何かやったかな。悪いことしたかな」

「桜美は関係ねえだろ」

「そうかな。そうだったら嬉しいな。私嫌われない」

桜美は嬉しそうでも悲しそうな顔でもなく、無表情だった。

「化野君……怖がってた。桜美ちゃんもF君も……私も。そしてクルースの子全員も」

桜美は悲しそうな顔で「え」と呟き。Fは目を丸くして「はあ？」と鹿乃を睨んだ。

「私の力。二人とも知ってるでしょ？ 本当のことだよ」

いつも優しい表情をしている鹿乃だったが、このときは少し悲しそうな顔でそう言った。

■ ■ ■

トントンと校長室の扉を叩く。中からは「入っていいよー」と、ご機嫌そうな声が聞こえた。

「失礼します……化野です……」

教室を出て行ったあとに、校長室に呼ばれることが喜ばしいことではないことに気づいた。高確率で説教がくると思っていたので、化野は少しでも相手を怒らせないように、身だしなみや、会話に気をつけようと思った。

「きゃは！ はじめまして菊也君！ 校長ですよーん。昨日大丈夫だった？ 侵入者いたって聞いたけど」

入った瞬間に会話が始まったので、驚いて少し反応が遅れた。

「は、はじめまして。はい、僕は大丈夫でした」

校長の姿を見て、やっぱりこの学校は変だと改めて思った。校長の頭にはピンクのパンダがいた。妙に目つきが悪い。顔を見せたくないのか……？ただふざけているだけなのか？つつこみを入れるべきだろうか。パンダのせいで年はわからないが、声や体系で若い男なことがわかる。

「安心してねー。昨日桜美ちゃんと萩ちゃんがやつつけたやつらは

捕まえて警察に突き出したから」

「はい」

「ところで最近どう？ 学校楽しい？」

楽しい。と答えればいいのに。俺は答えられなかった。

「はは。まだわかんないよねー。始まったばかりだし」

校長はずつとソファーに座っていたが、化野がずつと出入り口前で立っていることに気づき、化野に自分の対面にあるソファーに座つてと指示した。

「僕は優しいからね、菊也君が心配なんだよ」

「あ、ありがとうございます。でも大丈夫ですよ？」

「嘘つきだーい」

校長はヘラヘラ笑った。

「本当はどんな気持ちなの？ 相談していいよ？ 力のこととか……ね？」

“力”、俺はこの単語に反応した。今一番知りたいのは力のことなのだ。怖いものの正体は知っておきたいのが人間だろう。化野は、力への気持ちを吐いた。

「怖いんです……」

「へ？」

校長はまぬけな声を出した。

「この学校が怖いんです……。友達も、生徒も、先生も。どこかにある力が怖いんです……」

ちらつと校長のほうを見ると、ピクリとも動かず固まっていた。飲んでいた紅茶が入ったコップを持ったままだった。

「校長先生……？」

「あ、へえ。怖い？ へえ！ 怖いの？ それは意外だなー」

校長は持っていた紅茶を一口飲んだ。

「怖いねえ……変なの。だって菊也君だって」

菊也君だって、その言葉の続きを言う前に校長室の扉が勢いよく開いた。校長は特に驚いた素振りを見せず、ゆっくりと扉を見た。

化野は驚いて体が跳ねた。

「お前：今なんて言いやがったあ！」

扉を開けたのはFだった。なんだかすごく怒っている様子だった。
「おお。F君じゃないか」

Fは校長の言葉を無視して、ずかずかと校長室を歩き、菊也の座っているソファの前に立った。

「え、ええ！　なんだよF！？　なんでここに……」

音が聞こえた。視界は歪んでいた。頬にものすごい痛みを感じた。
Fが化野を殴った。とても、とても強く。校長は止めようとせず、
ゆっくり紅茶を飲んでいる。これ上手い！と言っているのが聞こえた。
化野はソファから落ち、仰向けになっていた。Fはその横に立っていた。

「この学校入つといて怖いとかなんだよお前！　失礼だと思わねえのかよ！」

化野は何も言えなかった。痛みのせいでもあった。

「桜美のやつ傷ついてんぞ！力が怖いとか、今頃言つてんな！」

「まあまあ、F君。落ち着いて。菊也君はね、何もわかってないんだよ。力のことだって」

「はあ！？」

校長の言葉にFは驚いて、校長の顔を見る。そこにはパンダがいる。

「力をわかってないって本当かよ……。そんなんでこの学校来たのか？　こいつ馬鹿だろ……」

Fの言っていることが化野にはわからなかった。

「何のことだよ……痛っ」

化野は起き上がり、床に座った。

「教えてあげようじゃないか菊也君。この学校は不思議な生徒が集

まる。それはわかっているだろう？ その中には“力がある人間”
がたくさんいる。権力や筋力ではない。魔法的な力だよ！」

どっかで聞いたことがあるようなフレーズがあった。

「力がある人間を実験やら、コレクションにする悪い人がいたり
してね、それは危険だから！ この学校に皆が集まる。皆で入れば
怖くない！ そんな学校。OK？」

「力がないやつもいるがな」

Fが補足を加えた。

「力を初めて見るのなら怖いのも当たり前だよ。だけど、大丈夫
なんだよ。友達を傷つけるような子は生徒にはいないし、ちよつと
魔法が使える友達がいると思っておけばいい」

魔法。そんなメルヘンな言葉で済まして良いものなのか。俺にはた
だの恐怖でしかなかったのに。魔法だなんて、漫画や小説の中でし
か見たことない。いや、つい最近この目で見たのだが。

「まだ……怖いのか。危険じゃないんだぞ」

Fが化野のほうを見てそう言った。俺はFの悲しそうな顔を見て
いた。

「桜美が傷ついてんだよ。お前のこと気に入ったみたいだし」

それはわかっている。だけど怖いんだ。力が力が力力？力力！

「俺と、桜美に、お前が怖がっている力はないぞ」

「え」

Fの言葉が予想外の内容だった。

え……？桜美に力がない？

「だって！ でかい石が落ちてきたじゃねえーか」

「あー。あれは桜美の罨だ」

「罨……？」

「あれ、菊也君知らないの？ 桜美ちゃんも罨を作るのが癖。というか、罨がなくちゃ安心できない子なんだよ」

校長はバツと両手を広げた。

「このビレビラ高校は罨の巣！ 桜美ちゃんの手の上！ 物は落ちてくるし、抜け道はあるし。本当、おちゃめだよー」

「なんだよそれ…力はねえのかよ」

どうしてか、化野は少しだけ怖くなくなった。

「もう、桜美のこと怖がってやんなよ。あいつそろそろ泣くぞ」

「お、おう……」

なぜ、Fがこんなにも桜美に尽くすのか、それは俺にはわからない。きつとずっとわからない。

「菊也ああああ！ ごめんねええええ！ 盗み聞きしてたああ！」

校長室の開きっぱなしだった扉から桜美が入ってきた。顔はぶつ

さいくな泣き顔で、化野に抱きついた。

「わあああ。なんで泣いてんだよ！」

「だって菊也に嫌われたのかと思ってええええ」

桜美が俺を気に入ったわけもわからない。これも、きつとずっとわからない。

「もう……怖くないの？ 私怖くないの？ 私友達に傷つけないよ
おお、ぐすっ」

「ごめんごめん。なんかもう吹っ切れたわ。力でもなんでも、怪獣でも恐竜でも、神様でもなんでも来いって感じ」

「菊也馬鹿ー！ 神様は悪者じゃないよおお」

つつこみながら泣いてる桜美を見て、Fと化野はくすつと笑った。

「化野君」

もう一人、校長室に入ってきた。塩谷鹿乃だ。

「私は力を持つているの。怖いのなら、私はなるべく化野君に近づかないようにするけど……」

「え。塩谷さん力持つてるんですか……」

「うん。危険なものではないけどね。人の気持ちがわかるの。好きとか嫌いはわからないけど、喜怒哀楽とか怖がってるとか、緊張してるとか、殺気とかがわかるの」

鹿乃は悲しい顔をしていた。

「大丈夫ですよ。言っただじゃないですか。もう吹っ切れました。怖くはないですよ」

「ふふ。そうみたいね。もう怖がっていないのがわかる。ありがとう化野君」

鹿乃の目には涙が浮かんでいて、我慢しているようだった。

「やったねー！ 鹿乃ー！」

「うん。良かったね」

桜美と鹿乃は抱き合って喜んでいた。なぜかそこに、校長が混ざって喜んでいたのは無視することにした。

「なあ、桜美と鹿乃はわかるけど、なんでFはこの学校来たんだよ」
まだ座ったままだった化野は、横で立っているFの顔を見上げて
そう言った。

「別に、なんとなく」

「ええ！ なんだよそれ！」

「じゃあ、化野はなんで来たんだよ」

「えーと……なんとなく？ ほら、家近いし……」

「な？ そんなもんだろ」

校長室に来ることによって、俺の中に咲いていた。恐怖の花が散った気がした。

校長に、用はなんだったんですか？と聞くと、もういいよと答えた。昼は早いもので、あと二分で授業が始まるころだったので、化野とF、桜美と鹿乃は急いで教室に戻った。

「はは。面白いものが見れたなあ。へえ、鹿乃ちゃんも力あったんだ」

残った校長は、被っていたパンダを自分の机に置いて、Fが化野を殴ったときにずれたソファアの位置を直した。

「問題です。さっきの四人の中に嘘つきが二人います。さて、誰でしょう？はい！札素火君！」

ガチャッと扉が開く音がして、校長室の奥のほうにあった扉が開いた。

「そんなのわかりませんよ」

「いや、嘘つき三人かな？ まだ断言はできないけど」

「はいはい。あ、これ。新しく力持つてる子二人見つけたんで、デ―タ書類です」

「あーい。ありがとー。さっきの鹿乃ちゃんのやつもまとめといてねー」

「わかりましたよ」

「はあ、侵入者のことも気になるし、これから大変だあー！」

「楽しそうですねえ。めっちゃ笑顔ですよ」

「へへっ嬉しいもん」

「本当、あんたはガキですね」

「そりゃあ、君より年下だし」

「そういうことじゃないですよ、精神年齢が小学生くらいだなんて言いたいんですよ」

「ええ！ ひど！ 君はおっさんみたいじゃないか！」

「はいはい」

「その、はいはいっていうのやめてよ！ 聞き飽きた！ 口癖でしょ！」

「はいはい」

「ばーかー！」

化野の恐怖心は少なくなり、また友達と普通に話せる生活に戻った。だけど、この学校に来たからには休みなどない。また新たな問題が発生するのだから。

全ての問題に、参加できる人間なんていない。そして解決できる人間なんていない。

三章：「光栄」

彼女は自分が大好きだ。いや、自分の何かが大好きなのだ。人間として、生物として生まれてきたのだから、自分自身が一番大好きで大切なのは当たり前のことだと思う。だからだれも責めてはいけない。だけど、彼女はそれとは少し違っていた。

始業式から二週間が経ち、彼女は中学生だったときよりも楽しい学校生活を送っていた。

「萩ー！」

「萩おはようー！」

「あ、おはよう！」

二人の女子高校生、沙紀と秋が、普通の女子高校生とは何かが違っていているような女に声をかけた。何かが違う女、猪本萩は元氣よく返事をした。学校に登校中であるためセーラー服の姿だった。

「今日英語の小テストだよー？ 萩勉強した？」

「私がしてると思う？」

「はははっ、私も私も！ もういいやーって感じ！」

どこにでもいそうな高校生。どこにでもありそうな会話。だけど、何かが違う。

「そうだ、沙紀と秋はさあ、部活とか決めた？」

「沙紀は家庭部は入るんだっけー？ 秋はまだ決めてない」

「うん。二人も家庭部入りだよ！ 料理とか手芸とか楽しそうだよ！」

「料理か……」

「あ。猪本さん」

学校の校門の前に来たところで、男が猪本の名前を呼んだ。

「え、あ！菊也……！」

最近、気になっていた男の子から話しかけられたのだから、平常心を保つことは不可能である。好きとか嫌いとか、そんな感じの気になるではない。ただ感謝するべき存在。猪本はそう思っていた。化野と初めて会ったとき、手を少しだけ怪我をしていた猪本を、沙紀と秋が治療してくれた。怪力なんだよ？私のこと怖くなかった？と聞くと、二人は化野が猪本と話してるのを見て安心したから話しかけたと答えた。化野のお蔭で友達ができた。それが何よりも嬉しかった。

「あれ、俺の下の名前知ってたんだ？」

「あ。その、う、うん」

後から調べただなんて言えない。

「じゃあ、俺も下の名前で呼ぶよ。萩だっけ」

「え！ あああはい。萩で合ってまりゅ」

「ちよつと萩。何噛んでるのよ」

横にいた沙紀と秋はニヤニヤと笑いながら猪本を見ていた。

「じゃ！ 俺ばしられ中なんだよ。桜美とFに怒られるから先行くわ」

「う、おう！」

パシンと横から秋に叩かれた。おう！ではなく、うん！と言えと小声で怒られた。小走りで走っていた化野を見ていたら急にこちらを振り向いた。

「クッキーありがとなー！ 美味しかったー」

化野はそれだけ言っつて、校舎の中に消えた。その言葉を聞いて、猪野の表情は明るくなる。

「私！ 家庭部は入る！」

「ええ！ 萩も入るなら秋も入るー！」

「へへつやったね。三人とも家庭部だー」

一人はクッキー目的で、一人は友達に付いていくために、一人は

手芸上達のため、同じ部活に入った。

■ ■ ■

「うひょー！ 菊也が来たー！ アイスー！」

化野の机に座っていた桜美はガタガタと音を立てながら机から降りて、教卓の前にいる化野に飛びついた。

「うよー。化野が来たー。迅速にアイスをくれっ」

自分の席に座っていたFは桜美の真似をしながら、化野のほうへ向かった。

「うよー、じゃなくて、うひょーだろ。Fやり直し」

「うよー」

「もういいわ」

学校では登校してきた生徒たちが集まって来ていて、ほとんどの生徒が登校してきたところだった。

「うわ。あと十分で授業始まるぞ。急いで食べ」

「十分もあれば桜美様は勝てる！」

「アイスに勝ってどうすんだよ」

「皆ーお知らせだよー」

一人の生徒が教室の前で大きな声を出した。

「一時間目、時間割変更で英語はなくなって、なんか校長先生が話しにくるって」

それを聞いた生徒たちは、英語の授業がなくなって喜んでいたりも、校長が何を話してくるかを予測し始めるもので騒がしくなっていた。その中で一人だけ違う感情のものがいた。

「校長……！？ あいつが来るのかよ」

化野は顔を青くしていた。まるで苦手な食べ物を嫌がっている子供のようだった。

「あれ？ 菊也校長先生嫌いな？ 面白い人だよ？」

「桜美。お前校長と話したことあるか？ 俺、話したけど、完全に俺の苦手なタイプだった」

「私とFきゅんの行つてた中学も同じ校長なんだよー。だからいっぱい話したことあるよつ。良い人だよ！」

「え！？ 高校と中学の校長やつてんの？ どうなつてんだ……」

「たしかに変なやつだが、別に嫌なやつとは思わねえな」

「だよねーFきゅんきゅん！」

「桜美。きゅんを取れきゅんを」

そんな会話をしていると、チャイムが鳴った。桜美とFはアイスを口の中に放り込み、急いで席に座った。そして、チャイムが鳴り終わった。瞬間。

「があああああああああ！！！」

ドタン、ボタンと大きな音がなり、教室の前の扉は宙を舞い。それについていくように教卓も舞い始めていた。廊下から何か物体が飛んできて、今は教室の左前、化野の席の前に静止している。

「……」

化野は驚きと呆れが混ざったような顔をして、その物体を見ていた。

「あ。ごめーん。せっかく初めての授業だしーかつこよく教室入ろうと思つてたんだよね。前方倒立回 転とびで入室を考えてたんだけど、扉が閉まっているのが計算外でね。止めようと思つたんだけどもう遅くつて、つつこんじゃった」

化野の前で寝そべっている黄色いパンダは、ペラペラと登場の理由を話した。

「きゃはははは！ 校長先生ー！ 早く授業始めよー！」

桜美はバンバンと机を叩きながら校長を笑つて、授業の始まりを急かした。

「はいはい。あ、あいつの口癖移ったし。畜生」

校長はブツブツと何かを呟きながら教卓の位置を直し、皆の顔見た。

「はい！ 号令省略ー！ 僕が校長先生でーす！ まあ、ほとんどの子知ってると思うけどー」

「今年度はパンダなのか？ 校長」

一人の生徒が校長に話しかけた。

「そう！ 前は兎だったし、今回はパンダにしてみたよー」

教室は、笑いのせいで騒がしかった。

「なあ、F。校長っていつもこんな感じなの？」

「ああ、うん。こんな感じ」

校長は勉強はせずに、自分の武勇伝を語って、好きなテレビ番組の話をした。今は心理テストで遊んでいた。

「はい菊也君に問題ー！」

「え！ あ、はい！」

化野は、ぼーっと窓を眺めていたので、急に名前を呼ばれたことに驚きながら返事をした。

「だ、だん！ 菊也君はロケットで宇宙に行けることになりました！ さて、菊也君は何がしたい？ 一、宇宙人を見てみたい、二、どこかの星に住みたい、三、宇宙食を食べてみたい、四、宇宙の果てまで行ってみたい。さあ、どれ？」

校長はニコッと笑って、菊也に問う。その問いにすぐに答えを出した。

「えっと……四です。宇宙の果てまで行ってみたいです」

「へえ」

「？」

まただ。あの声。あの普段より低くなった声。俺はこれが嫌いなのだろうか。あのパンダのきぐるみを取ったら、きつと不気味に笑っているに違いない。そんな声だ。それにしても、スーツを着ている

人の顔がパンダなのは奇妙な光景だ。

「四を選んだ君は！……今の自分が嫌い。または不満がある。そして、違う自分になりたい……ははっ。もっと前向きになりなよ。はい次！君に決めた！」

校長はまた違う生徒に問題をぶつけていた。

自分が嫌い。嫌い？好きの反対だ。これはただの心理テスト。当たっているだなんて、思いたくない。

心理テストとか、占いとか、それは人間の心を上手く使っているもので、人間にそう思わせようとしているだけなのだ。そう、これはただの暗示。朝見た星座占いが良いと一日が輝いて見える、最下位だと世界は暗く見える。それと同じ。だから校長が言った言葉なんて無視して良い。だけど、不満。自分に不満。違う自分になりたい。これは、まったく間違っていないかった。

「よし！私が校長先生に心理テストするよー！」

「おお！来い！桜美ちゃん！」

校長は戦闘態勢の構えをした。

「風船をもった女の人がいきました。さて、その人は何歳だと思いますか？」

「八歳だー！」

「きやははは！それは校長先生 of 精神年齢でーす！きやははは！八歳ー！」

「な、なんだと……！？」

その後はまた、校長の武勇伝が始まり、十分後に授業は終わった。

■ ■ ■

「はあーお腹すいたー。早く購買行こー」

「財布財布」

「早くー」

猪本、沙紀、秋の三人は昼になると、すぐに購買に向かった。秋はお腹がすいたと嘆いていた。

「パン三つ買おうかなー」

「三つ!? 多すぎでしょそれ」

「太るよー?」

そんな普通の会話をしていた三人だが、急に動きを止め、立ち止まった。三人の表情は暗く、怯え、激怒しているようだった。

「また来たの? いい加減うざい」

場所は校舎西館一階の廊下。

「すみません。うざくて」

三人しかいなかったはずの廊下が変わった声が響いた。

「はじめまして。お迎えに上がりました」

「はあ?」

三人の前に男は立っていた。執事がよく着ているような服装の男だ。先ほど秋がまた来たの? と言ったが、この男とは初対面だった、人違いをしたらしい。

「意味わかんない。私あんた知らないよ」

「当然です。初対面ですから。」

男はニコニコと笑いながら言葉を吐いていた。顔は誰かに似ていた。誰か。気になる人。

「申し遅れました。俺はゼットアットと申します。用件は……猪本萩さんの勧誘です」

礼儀正しい言葉使いの中で、「俺」という一人称が変に思えた。

「私の勧誘?」

「そう、俺と一緒に来ませんか? 力を有効活用したくありません?」

「行かない!」

男の言葉に迷いもせずに答えた。

「あんだね！ それって、お菓子あげるから付いておいでーっていう不審者と同じだよ！」

「そう、なら無理やりで、失礼しますね」

男はニツコリ笑ってから、パンつと手拍子をした。そうすると、隠れていたであろう人が窓や天井から二十人くらいでてきた。その姿は普通な姿だった。普通とは、よく外に歩いているような人たちのこと。サラリーマン、学生、主婦、ちよつと年を取った人までいた。

「はい、連行。後ろの二人も一応連行ね。めんどくさいことになりたくないからさ」

執事の姿をした男はずつとニコニコ笑っていた。その表情と同じく、仲間だと思われる人たちも笑っていた。

敵の一人が猪本に向かって長い棒を振り落とした。

「ちっ」

猪本は舌打ちをした後に、攻撃をしてきた敵に思いつき蹴りを入れた。敵は飛んでいつて廊下に転がった。それから三人が一斉に猪本に向かって攻撃したが、力を持っている猪本にとってはまったく問題はなかった。次々とやってくる敵を蹴飛ばして、殴って、蹴って、殴られて、蹴られて。秋は自分の周りに半透明な結界を出して沙紀を守っていた。沙紀はその結界を壊そうとする敵に、結界の中から銃を向けていた。

「ははっごめんね。抵抗してくれてるみたいだけど、俺は数に頼る者なんで、抵抗は無意味ですよ」

その言葉とともに、窓から人がたくさん入ってきた。その数は目で数えるのは不可能。いったいどこから出てきたのか、どうやって隠れていたのか、萩と秋と沙紀の脳内は「？」で埋まっていた。

「ちくしょつ！ 私だけでいいだろ！ 秋と沙紀は関係ねえだろ！」
猪本は針金のように硬いロープで巻かれ、身動きが出来なかった。
「きやつ」

バンつと沙紀の持っていた銃から音が鳴ったが、銃から出てきた弾は地面に向かっていつて、誰にも当たらなかった。数え切れないほどの人の数に、三人は何もできない。

「はい。皆退散しますよ。捕まえた人たちは、Aグループに猪本萩さんたちを渡してください。そのあとAグループは例の倉庫で待機です」

猪本は人の隙間から執事姿の男を見た。その表情はさつきと同じでニコリ笑っていた。猪本の視線に気づいた男は手を振りながら「また、いつか」と口を動かしていた。薬のようなものを吸わされて、猪本の意識は消え始めていた。

ああ。私のせいで沙紀と秋も巻き込んで、私最低じゃん。周りからは破壊魔少女とか言われてるのに、数には負けるじゃん。何もできないじゃん。弱いなあ。弱い。弱い弱い弱い弱い弱い。あの執事野郎は何だ。私たちを実験にでも使うのか？私はどうだっていいよ。でも、この力を持っておきながら守れないだなんて、やだな。守れないならこんな力いらないじゃん。いらない。負けちゃうじゃん。

お願いだよ。言い訳をさせてよ。聞いてくれるだけでいいからさ。お願いだよ。私は今回、力を精一杯使ってないんだ。何だか、使えなかったんだ。体調が悪かったわけではないけれど、使えなかったんだ。だって、だって。あの執事野郎、顔も声も、あいつに似てたんだ。だからちよつと怯んじやつたんだ。ごめんね、言い訳だよ。なんでなんでなんで。

なんで……菊也に似てたんだろう。

：「光荣」二

- 教室 -

「え、弁当ない」

「きやははは！ 菊也馬鹿ー！」

「俺購買行ってくる」

「お、F。俺のも適当に買ってきて」

「んー」

Fは本当に承知したかわからないような返事をした。

菊也のやつ、俺をパシリに使いやがって……めっちゃまずそうなパン買ってきてやる。

Fたちの教室から購買までは距離が長かった。そのため、いつも購買に残っているものは、どれもまずそうなものばかりだった。

「きやあ！」

購買へ向かっている途中、廊下にある角を左に曲がろうとすると、進行方向から女の悲鳴が聞こえた。Fは何事かと思い、慎重にそちらを見た。慎重に見たのは、Fの経験上から、そのほうがいいと判断したからだ。

あれは……猪本と一緒にいた女？ん？猪本もいる……？てか、おいおい。これやばいんじゃないか。

俺が行っても、意味はない。校長に知らせるか。いや、もう知っているかもしれないなあ。

というか、こんなに大勢の人。どこに隠れてたんだ。中心のやつ顔だけでも見て……おいた……ほう……が？

大勢人がいるのだから、何かの団体なら、中心になる人物がいるはずだ。それを見ようと、隠れていたところから、少しだけ身をずらした。中心になる人物はすぐに見つかった。人の中で、唯一立っているだけのもの。人は皆笑っていたが、その人物だけは、気味が悪い笑顔だった。だが、そんなことはすぐに忘れて、表情に違和感と疑問を感じる。

……は？気のせい？いや、でも。似てるなあ。すごく。え、菊也？

Fはその人物を見て驚いた。予想外だった。その顔は、まるで化野菊也が大人になったような姿だった。

音を出したら気づかれると思い、その場を動けなかったFは、猪本たちが拉致されるのを見ることができなかった。

くそつ。猪本の力でも逃げられないのか！？人数か……たしか猪本といつも一緒にいる女二人も力を持っていたはず。あの三人で無理なら、俺が行ったところで、一緒に捕まるだけ。それならば、ここは見過ごして、校長や桜美に伝えたほうが……。

「たしか……Fさん、だっけ？」

Fはずっと化野に似ている男を見ていたはずだった。だけど、その姿はもうない。そのかわりに背後から男の声がする。

「どうも」

背後には、化野に似ている男がいた。慌てても意味はない。できるだけ冷静に挨拶らしいものをしたが、顔は苦笑いだった。冷や汗らしきものが、肌に沿って落ちる。

「いいとこに来ましたね。よし、Fさんに頼みますよ」

男はFと名前で呼んでいた。だが、本人のFはこの男を知らない。「三人は誘拐された。わかりますね？ 助けるんですよ。はい、これが地図です。円が書いてあるところに三人はいますよ」

敵のはずなのに三人を助けると言ってきたことに、Fは疑問を持ち、畏かと疑った。

「畏ではありませんよ。三人はきちんといます。まあ、奪還を阻止するものはいませんが、それ以外にはありません。一応俺もいますよ」
「信じると」

「そう、信じてください。それしかFさんだつてできないでしょう？ これを無視して、三人をどうやって助けるんです？ こっちは隠れるのが得意なんですよ？ ……頭の良いFさんならわかるでしょう」

男はゆっくりとFの背後から離れた。そして窓のほうへ歩き、こちらを向いた。

「俺はゼットアット。助けにくるときは、ぜひ、幕野桜美も連れて来てくださいね。彼女はとても面白いですし。いや、学校以外のところでは無力なのかな？ それなら……化野菊也を連れてください。あ、彼も無力……ふふ」

ゼットアットが自分たちの名前を知っている。この学校にいる力があるものを、何かに使おうとしているものなら知っていて当然だった。だからFは、その点については疑問に思わない。

Fは、ゼットアットの顔を睨みつけてた。

「Fさん、幕野桜美さん、化野菊也さん。本当に無力な三人が集まりましたね。幕野桜美は場所が変わりますが……」

「弱くて悪かったな」

「いいんですよ。“仕方がない”んですから。では、地図のところで待っていますね。あ、他の人も呼んで来ていいですよ」

ゼットアットは窓から出て行った。

さて、校長に指示を仰ぐか。桜美と化野には言わないほうがいいな……。

Fの脳内には、ゼットアットの言葉がエンドレスで流れていた。

無力な三人。そうかもしれない。それは否定できない。学校でなら、桜美が有力だが、学校から出たら何もできない。はあ……俺がしっかりしなくちゃな。俺が少しは戦えるようになれば……今日からラニングでもするか。それよりも先に、あいつらを助ける。これは絶対だ。

■ ■ ■

「うん。来ると思ってたよー」

Fが校長室の扉をノックして、部屋に入ろうとしたところで、校長は言葉を吐く。

Fは静かに扉を閉めた。

「見てたんですよ。三人の場所は知ってます。助けに行っていますか」

「一人は駄目だよ？ それにしてもF君は成長したよねー。中学生のときなんか、僕に報告しないで、勝手に突撃してさ」

「そんなこと忘れました。一人が駄目なら、誰と行ったらいいんですか。桜美と化野は却下です」

「んー、じゃあ、札素化くーん！ カモン！」

校長室の奥の扉がゆっくりと開く。

「はい？ なんですか、今、書類整理中なんですけど、急用ですか？」

「萩ちゃんと秋ちゃんと沙紀ちゃんが誘拐されちゃったから、F君と助けに行ってきたー」

「はあ！？」

札素火は驚きの表情を見せ、校長が座っているソファアの近くに走ってきた。扉の前で見ているFは、いつもだるそうな顔をしている札素火の、驚いた顔を始めて見たなど、珍しがっていた。

「あんたねえ！ そういうことは早く言え！ ちくしょつ、こんな

ときに冷静にダラダラしてられるあんたの気がしれん。本当、あんた嫌いだわ。あーくそつ。あんためんどくせ……馬鹿が」

「札素火君。慌てても仕方ないんだよ。僕だって心配はしてるんだから。札素化君は今、慌ててるだけで、自分を見失ってるだけなんだよね。なら、馬鹿って言ったことは許してあげるよ」

「はいはい。俺は見失ってなんかいませんよ。F、行くぞ。馬鹿は無視しとけ」

「はい」

「こらー！ 二人とも反抗期なんだからー！ 起こるぞー！」

校長はソファーに座りながら怒っていたが、札素火とFはそれを無視して、校長室を出た。校長はきぐるみを机の上に置いた。

「ん？ 前髪伸びた？ そろそろ切らないとなあ……」

既に、校長の脳内からは猪本たちのことは消え去っていた。校長は、心配などしていない。札素火が助けに向かったからではない。

三人の安否など、どうでもよかったのである。

■ ■ ■

「ふーん、この地図か。罨くさいな」

「信じろって言ってます」

学校の外、街を二人で走っていた。Fと札素火の二人が走っているのを見たものは、皆、目を合わせないようにしていた。その理由は、二人の外見にあった。Fは金髪のロング、その時点で近寄り難いの、額に傷があることによって、不良にしか見えない。札素火のほうは、外見から先生と思うものは絶対にいない。髪はどっかのホストのように、きつちりとワックスでセットしていて、色は金髪に近い茶髪だった。こんな二人が街にいたら、目を合わせないようにするのが普通だろう。

「先生。なんでこんなことするんだと思います？ 黙って誘拐すればいいものを」

「さあな。なんか楽しんでるんじゃないの。俺の近くにも似たような阿呆がいるよ」

「？」

「ん、こつち」

二人は街にズラリと並ぶ建物たちの間を通って、目的地に向かった。二人の気持ちは同じものだったが、一人の脳内には、敵の顔がはつきりと写しだされていた。その顔を忘れようと頭を振ったが、そんなもので忘れるような記憶ではない。急に二人の足取りが止まった。

「……あれか？」

「だと思えます」

目的地を見つけた二人は、慎重にその建物へと向かった。

■ ■ ■

「おいおい、F遅くないか」

「そうだね。もう五時間目始まつてるのに」

Fに約束を破られたことも知らずに、化野は授業を受けながら、Fの帰りを待った。

「あー腹減った」

「さっき私のワインナーあげたじゃん」

「桜美……ワインナーの質量考えるよ？俺の空の胃袋に、あんなに小さいワインナーが登場したところで、何も変わりはない」

「あそ」

二人は生物の授業を受けていた。先生は、今にも倒れそうな年老いた先生で、生徒が寝ていようが、携帯やゲームをやっているが、その先生は気づきもしない。もし気づいたとしても、少し注意する程度だ。生徒には完全に舐められていた。

「むむむ！臭いぞ！臭い！」

「ん？ 何か臭うか？ 俺は何も臭わないけど」

「違う！ Fきゅんのこと！ Fきゅんはね、私のメールには、五分以内には絶対返信するの！」

授業中だというのに、桜美は大声を上げて、化野に手のひらで五の数字を作って見せた。教室内はざわめいているので、二人の会話が、特別浮いて聞こえることはなかった。

「だけど、Fきゅんは昔から何かあると、返信をしないんだ！ さつきメールしたけど、十分待っても返信なし！ よって今のFきゅんは臭い！」

「ふーん、で？」

「校長先生のとこ行くよ！」

「やだよ。俺あいつ苦手なんだよ」

「誰かが危ないかも」

「なんでそうなるんだよ」

「菊也。この学校はそういうところなんだよ」

「はつきり決まったわけじゃないだろ？」

「このFきゅんの行動は、百パーセント何かあった」

「いやでも俺、校長には会いたくないんだけど……」

「行くよ！ 先生！ 私と菊也、頭痛いから保健室行ってくるー！」

「はい、わかりましたよ」

先生はゆっくりと返事をした。

「ちょ、おい！」

化野はぐいぐいと手を引っ張られて、教室を出た。

教室にいた生徒たちは、化野が桜美に遊ばれている様子を見て、哀れな気持ちで二人を見送った。

■ ■ ■

「おし、あっちは来ることわかってんだから、正面から登場してやるか？」

「俺は何でもいいです」

「てか、俺は力あるけど、Fはどうやって戦闘する気だ？」

「銃あるんで、あとは棒とか振り回しておきますよ」

「はいはい、法律やぶってんのを軽く言っただけはスルーしとくよ」

Fは、力を持っている先生を見たことがなかった。力を持つのは、学生だけだと思っていたので、自分に間違いがあったことに気づく。

「先生は……どんな力なんですか。一応、聞いておいたほうがいいかと思って」

「……うーん、説明しにくいけど、鎖と錠前の召喚ってとこかな」

「ん、あの、有名な力？ 綺麗に戦うって聞いたことが……」

「ただの噂だよ」

そう言った札素火は、堂々と正面の扉に向かった。建物は人気がない場所にあり、昔は何かの倉庫だったようだ。鉄と鉄が重なりあつて、鈍い音が響く。倉庫の中は予想より明るかった。窓からの光が強いせいだろう。

「いらつしやい」

男の声が響く。

「なんだあれ」

「あ……はい」

札素火は、出迎える言葉を吐いた主の顔を見て、ある人物を思い出した。札素火の心を読んだのか、Fは曖昧な返事を返す。

「あれ？ Fさんの他にも来たんですね。まあ、構いませんが。んー、たしか名前は錠前さんでしたっけ？」

「札素火だ。勝手に力の名前にするな」

「それは失礼、札素火さん。俺はゼットアットと申します」

倉庫の中は広く、敵であろう人がたくさんいた。ゼットアットは、奥のほうにある鉄の塊に、ニコニコと笑いながら座っている。

「さあ、はじめましょう」

ゼットアットの始まりの言葉と共に、人はロボットのよう命令を聞き、その行動をする。ロボットみたいな人々は、札素火とFに

向かい始めた。まるで、遊具に乗りたがる子供のように。

「無理はするなよ、F」

「はい」

札素火は、Fが心配だった。仮にも、Fはまだ子供だ。それに特別な力が使えるわけではない。だけど、普通の人相手にFが劣っているとは思わない。喧嘩は強いほうであると思っていた。

Fが敵と接触した。が、札素火の心配は必要なかった。Fは次々と敵を倒していった。銃で、人が死なないように撃つ。足を打たれた敵は、痛みで地面に崩れ落ちた。右手には銃、左手には鉄の棒。まるでどこかの不良のようだった。

Fの姿を見て安心した札素火は、自分の目的を思い出す。

「さて、俺も始めっか。施錠を」

札素火の周りには、たくさんの人。一斉に、飛び込む。

「わあ、素晴らしい。綺麗って聞きましたので、どのようなものかと思ってましたが……」

ゼットアットは軽く拍手をした。札素火は、ゼットアットを睨みつける。

先ほど札素火に飛び込んだ人たちは、皆札素火の周りに寝そべっていた。手足や体に、大量の鎖を巻きつけて。それを装飾するように、たくさん錠前が付いていた。Fは札素火の力を見たが、何が起きたか、理解していないようだった。それだけ早かったのだ。あれだけたくさんいた敵は、皆地面に倒れた。Fは、助けに行くのは札素火だけで良かったなと考えた。たくさんの人が倒れている。いや、たくさん鎖と錠前の花畑と言ったほうが良いだろうか。

「はあ、グアッホ。んで？ 猪本たちはどこにいる？」

「へえ！ 札素火さんは力を使うと疲れるんですか？ それはそれは、お疲れ様です。鎖と錠前の召喚なんです、実際はどのような

力なんですか？ 綺麗とは、よく言ったものですね。たしかに、戦い方に無駄はなかった」

ゼットアットは、札素火の問いを無視し、自分の問いを返す。呆れたような顔をして、札素火は素直に話した。

「俺の力は“施錠”だ。鍵を閉めるだけの力。綺麗だなんて、どこ誰が言ったか知らねえが、もっと綺麗な力なやつはいる」

「いや、俺はたくさん力ある者を見てきましたが、札素火さんの、普通の綺麗とは違うんですよ。

宝石とか、景色とは違うんです」

「先生……」

「はいはい、わかってるよF。おいゼットアット。猪本たちはどこだ」

「奥にある部屋にいますよ」

あつさりと場所を吐いた。怪しさだけが浮き出ていた。だが、札素火は迷いもせずに、奥の部屋へ向かった。それに付いて行くF。

「さようなら、きっとまた会うでしょう」

「いつでも歓迎しませんよ」

「札素火さん、ひどいですね」

札素火が振り向くと、もうそこにはゼットアットの姿はなかった。倉庫の中は、気絶した人と鎖と錠前で埋め尽くされている。

奥の部屋に鍵はなく、簡単に扉を開けることができた。

「んー！」

そこには、猪本の姿があり、残りの二人は眠ったまま倒れていた。猪本の口に巻かれていたガムテープを外し、言葉を自由にする。全身には、鉄のようなロープが巻かれていた。

「せんせっ！ ありがとうございます！」

言葉が自由になった瞬間に、お礼の言葉を吐く。

「この二人は大丈夫なのか」

「あ、はい！ 気絶してるだけです！」

札素火とFは、巻かれているロープを取る作業に入った。

「ん？」

部屋に、Fの携帯のバイブが鳴る。Fは急いで携帯に出た。

「化野？ 何？ …… あー、校長に話聞いたのか。ああ、まあ終わったよ。大丈夫……そうかねえ？ 人それぞれじゃね」

「何が、人それぞれなんだ？」

札素火がFに問う。

「あーなんか化野が、力ってやっぱ嫌だよなー、狙われたり怖がられたり、嫌だよなーとか言って、泣きそうな声なんですよ」

Fが札素火に説明すると、携帯からその声が聞けえたのか、「泣いてない！」と、化野の声が携帯から聞こえた。

「貸して」

猪本が自由になった手で、Fの携帯を取り上げる。特別に嫌なわけでもないのに、Fは素直に渡した。

「菊也。私はこの力が好き。この力を持てたことを光栄に思ってるんだよ」

そう言って、猪本はいきなり電話を切った。その後Fは何を思ったのか、天井を見つめる。札素火は、そのFの姿を見て、何かを考えた。

携帯の向こう側にいる化野が、泣きながら、笑いながら安心していったのは、化野本人と、横にいた桜美しか知らない。

：「光荣」三

少女は運動神経が良くなかった。女の子なのだから、運動神経がなくなつて困りはしない。男の子も生きていける。だから、運動神経がなくなつて、特別に困ることはないのだ。

たとえば、自分の背よりもずっと高い場所に欲しいものがあつたとする。ジャンプしても届きはしない。ジャンプ力などないのだから、だけどそこで無理と決め付けてはいけない。簡単なことだ。何か、台になるものを持ってこればいい。箱を持って、その上に乗れば、欲しいものが手に入る。なんて簡単な壁。簡単すぎる人生。だけど、台に乗つたからには、落ちないように気をつけなければ……。

少女は運動神経が良くなった。女の子なのに、その力は男顔負けだ。たくさんの人が怖がつた。そして、たくさんの人が、自分に近づいてきた。やめて、やめて。と、叫んだつて、きつと向こうに言葉は届かない。少女は、もうすぐ箱から落ちてしまう。箱は何も話さず、欲しいものだけが笑つていた。

なぜか自分も笑つてしまった。
猪本萩は笑つてしまった。

■ ■ ■

人の感情など、見た目や気だけでわかるはずがない。わかつてしまふことは嬉しいことなのか、悲しいことなのか。

「臭いぞ！ 臭い！」

騒がしい教室の中で、桜美の声が少しだけ聞こえた。

桜美ちゃん……ものすごく焦ってるみたい……大丈夫かな。

人の気持ちがわかる少女、塩谷鹿乃は今、感情の海に溺れていた。教室の中は、たくさんの感情で渦巻いている。楽しい、悲しい、焦り、怒り、無。その中には、殺気も混じり込んでいた。

「先生！ 私と菊也、頭痛いから保健室行ってくるー！」

桜美と化野が急いで教室から出て行った。

塩谷鹿野は、桜美の焦り方と、Fがないことに繋がりのあるのだろうと思った。教室からは、焦りの感情が消える。どこから感じる、殺気の感情も消え去っていた。

人の感情など、見た目や気だけでわかる。わかってしまうことは嬉しいことだし、悲しいこともある。

■ ■ ■

「お前誰だよ」

真っ青な空間で、青年はうつ伏せに寝そべっていた。無表情の中に少しの怒りを加えて、少年は言葉を吐く。

「誰だっつってんだろ」

青年は寝返りをして、仰向けになった。その姿は誰が見ても、やる気がないように見えた。着ているスーツはきちんと着ていなく、まるで、校則をやぶって教師に反抗している男子高校生のようだった。

「おい、聞いてんのか」

「うん」

真っ青な空間に、もう一人の影。そこにはパンダのきぐるみを頭に被った、小学生くらいの幼い少年が立っていた。

「お前誰なんだ」

また同じ問いを繰り返す。

「知らないよ」

「は？」

「僕は自分を知らないんだ」

幼い少年は顔を斜めに傾ける。パンダのきぐるみが揺れた。

「なんだよそれ。自分のことくらい知つとけよ」

「全ての人間が自分自身を理解してるとは限らないよ」

「……」

「君だつて、自分の説明をできるのかい？ できないでしょ？」

「……できないけどよ……名前くらいは言えるだろ？」

「ああ、名前はわかるよ」

「で、誰だよ」

「……だよ」

「ん？」

「……だよ！……！」

「聞こえねえよ」

「……！……！……！」

「……？」

「…………」

「……」

「…………」

「…………。」

「……。」

「…………。」

「ん」

青年は目を覚ました。

「うふあー！寝ちゃってたかあー」

部屋の窓を見ると外は真つ暗で、時計を見ると夜中の二時三十分だった。ソファアの上で体を伸ばすと、勢い余ってソファアから落

ちた。

「痛っ」

体は床に叩きつけられる。

「何やってるんです校長」

「ありや、札素火君」

「床で寝ないでくださいよ」

「落ちたんだよー」

札素火は呆れた顔をして、重たそうな箱を机に置いた。

「そうそう、いつも思ってたんですけど、そのスーツ大きくないですか」

「んーちよつと大きいかも」

「はあ、だらしない。あんた俺に、スーツはきちつと着なさい！とか言つてたくせに」

「へへ、札素火君は教師だしね」

「新しいの買つてきましようか。……サイズいくつですか」

「知らない」

「……自分のことくらい知つといってください」

「いいじゃーん！ 皆が自分のことをちゃんと知ってるわけじゃないんだから！」

「はいはい。それじゃ、今日は帰りますね。サイズ測つといってくださいよー」

「めんどくさーい」

札素火は校長室を出た。

「そうだ！ ロールケーキ食べよ」

校長は下に置いてあった、大きい箱に足を少しだけ打ち付けた。
「いてて……」

少しの間。

「なんかムカつく」

そう一言言い残して、パンダのきぐるみを叩き、校長室の端にある冷蔵庫を開ける。見た夢のことなど、覚えてはいない。

■ ■ ■

「すみません、ゼットアット様。猪本萩を逃がしてしまいました」
「はは、いいですよ。頭を上げてください」

某場所に、彼らがいる建物はあった。主である物の姿とはまったく逆の造りをしており、和室ばかりの部屋に、石と植物が敷き詰められた庭園。そこにある池には、たくさんの鯉。日本に伝わる、伝統的な家の造り。

「これからAグループはどうすれば……」

「うん、そうだね。戦闘の疲れもあるし、休んでいいですよ」

「ありがとうございます」

ゼットアットと話していた男は立ち上がり、出口へと向かう。

「ねえねえ？ Aグループってのはどんなグループ？ Aだから、

阿呆グループ？ 悪戦苦闘グループ？ 赤点グループ？」

「っち

「ん？ 今のは舌打ち？ ねえ？ 怒ったの？ 怒ったの？」

先ほどから疑問をぶつけているものは、ゼットアットの後ろから、顔だけをひよこつと出していた少女だ。真つ黒の髪は、肩にぶつかってぴよんぴよんと跳ねていて、大きい目からは純粋な心が読み取れる。

「ねえ、ゼットアットさん。あの人今舌打ちしたの？ なんで？

舌打ちって痛い？」

「ああ、気にしないでくださいね。行っでいいですよ」

ゼットアットは、少女の話を無視して、言葉を吐いた。

「はい、失礼しました」

男は部屋から出た。

「こら茶野。失礼なこと行ったら駄目ですよ」

「今のは失礼なことなの？ いけないこと？ 悪いこととしてごめんね？」

「次からは気をつけるんだよ」

「頑張るよ?」

ゼットアットは立ち上がった。

「どこいくの?」

「んー後で考えようかな」

ゼットアットは優しく笑っていた。

「ねえねえ、萩って子の誘拐なら、茶野がやるよ? 絶対失敗しないよ?」

「ふふ、失敗して良かったんですよ」

「……」

「ん? どうしたんですか茶野」

「ゼットアットさんは、また遊んでたんだね」

茶野が始めて疑問を止めた。

「うん、そうだよ。俺は無理やり仲間にするのは嫌だし、怖いしね。できれば向こうから来てほしい」

「茶野はこの皆といれて幸せだよ?」

「うん、俺ですよ」

ゼットアットは部屋を出た。それを追いかけるように、茶野が走る。

「なあ、茶野。ある少女が、力を持つことを光栄と言ったんだ」

「光栄? 誇り? ほこり?」

「どう思う?」

「変かも? 変な子? 阿呆? 馬鹿?」

「そうか……良い子ってことですね?」

「ん?」

ゼットアットはニコッと笑って、無理やり話を終わらせる。そして外へ足を運んだ。

「あーあ。良い天気。俺はこの空の下にいれることを光栄に思うよ」
「茶野もそうだよ？」

四章：「正解」勝利」

化野は決まっている道を歩き、決まっている場所へ行く。それはあたりまえのことである。

「ありや、菊也今日は早かったんだねー」

桜美とFは登校中に、化野の姿を見なかった。だから、遅刻なのかと予想していたが、それは間違いだった。

「早く目覚めたから、早く来た」

化野は机にうつ伏せながら答えた。

「ふーん……でさ、菊也さ、体操服持ってきた？ 見当たらないけど」

「え、今日体育ないだろ？ あるっけ？」

「Fきゅん……菊也何も聞いてないよ……」

「仕方がないんだ。化野はいつもボーっとしてて馬鹿みたいにしてるから、俺たちの言葉は通じない」

「そっか。だから何も知らないんだね……」

「仕方がない……」

桜美とFは真剣な顔で冗談を並べた。

「わかったわかった。通じるから。で、今日なんかあんの？」

「球技大会でございます」

桜美が笑顔で答えた。

「へ？」

■ ■ ■

「先生すいません！ 洗って返します！」

化野は深く頭を下げていた。

「ジャージはいくつもあるし、別にいいよ。洗わなくてもいいし」
「いや、洗って返します!」

化野が体操服を忘れたことを札素火にいうと、札素火はあっさり
と自分のジャージを貸してくれた。

生徒たちのほとんどが、学校指定の体操服ではなく、自分のジャージや、動きやすい格好をしていたので、先生のジャージを着ることになった化野が、浮いてみえることはなかった。

開式もなく、皆でやる体操もない。この学校らしいが、体操くらいはやったほうが良いのではないかと化野は思う。

「でさ、ここの球技大会ってどんな感じなんだよ」

この高校の行事なんて、何をやるかもわからないので、球技大会がどんなものなのか、化野は知らなかった。

「えつとねー、学校敷地内を逃げ回って、ボールを当てられるのを避ける! そしてボールで他の人を当てる! ボールを当てられたり、リタイアや続行不可になったら負け。残った人が五人になったら大会終了。その五人の勝ち!それだけ」

桜美は大げさに身振りや手振りをしながら説明をしていた。

「あと、人を当てるとポイントが一点上がって、ボールが当たっても、五点で復活できる。それと負けたやつにはバツがある、勝ったやつは良いことがある、らしい」

Fが桜美の説明に補足した。

普通の球技大会らしくないことに、呆れ、普通を諦めた。だけど、化野には一つの不安があった。

力を使ってくるやつはいないのだろうか……。

化野は札素火が前に言った言葉を思い出す。「化野君のクラスにだっていっぱいいるでしょ」この言葉は、学校中にも力を持っているものがいることを示していて、『いっぱい』という単語はどれくら

いの数なのかがわからない。それが怖かった。

「化野。お前が考えてることに答えてやるよ」

Fは化野の顔を見てニヤッと笑う。まるで本当に化野が考えていることがわかつているような……。

「ルールは、さつき桜美が言ったことだけだ。それ以外はない。」

最後の一言を強く言った。

「それ以外はないからな」

ただ、それ以外はないと……。

化野は、その言葉の意味に気が付いた。ルールには、力を使つてはいけないということがない。そう、力の使用は許可されている。

「こらFきゅん！ なに怖がらせてるんでええ！ 菊也大丈夫だよー怖いもんじゃないって」

「……うん」

もうすぐ大会が始まるのか、生徒が校舎からぞくぞくと出てきた。

「逃げるのって、校舎もありなの？」

「学校の敷地内ならどこでも、おーけー！ もちろん校舎内もいいよん」

「そろそろ……か？」

Fが上を見上げた。すると。

ダンダンダンダンコンダンダンコンダン

音。たくさんの音。その音は決して美しいものではなく、物が物にぶつかる音だった。

ボール。俺は間違えているのだろうか。ボールって、空から降ってくるものだっけ？

化野の目の前に影が迫る。

「ガッ！」

空から降ってきたバスケットボールが頭上を見ていた化野の顔面にぶつかった。そして、化野は地面に倒れた。

「きやははははは！ 菊也当たってるー！」

「ぶぶぶ」

桜美とFは腹を抱えて笑う。

「え、ちよつと待った！ 今のもカウントされてんの！？」

「きやはは！ 大丈夫だよ、今のはノーカン！」

空から降ってきたボールたちは、様々な姿をしていた。バレーボール、野球ボール、ラグビーボール、見たこともないボールも見かけた。

『やつほーい！ 球技大会始めますよ、只今九時なので、三時まで逃走してね！ 準備はいいかい？』

学校の放送から、校長の声が学校中に響き渡る。

「え！ もう始めんの！？」

化野は急いで起き上がり、体中に付いた砂を落とす。

『とにかく逃げて！ 当ててね！ 生徒も先生も参加だよ！ ずるいことしても駄目だからね！ 監視カメラあるからね！』

あつさりと監視カメラがあることを言った校長のことを、桜美は意外に思った。

『よいい！ スタート！』

校長が始まりの合図を出した。その瞬間に、周りにいた生徒たちは一斉に……

逃げた。

「え、え？」

運動場の端にいた化野は、生徒の行動を不思議なものを見るような目で見ていた。横にいる桜美とFは、動かない化野の様子を伺っ

ている。化野は、始まりの合図と共にボールが飛び交うと予想していた。が、その予想は容易く打ち砕かれる。

「ここにいるなんて、結構度胸あるんだなあ化野」

Fの言葉を聞いても、わけがわからないような顔をする化野。

「運動場なんて見晴らしのいいところ、いたら危ないでしょ？ 皆校舎の中とか裏とかに逃げてるんだよ」

桜美が化野に、皆が逃げてる理由を話すと、Fが苦笑いをしながら言葉を吐く。

「まあ……桜美がいるからって理由もあるだろうな……皆桜美は勝つって言ってたぞ？」

「ええ！ そうなの！？ うし、頑張るぞお！」

気が付くと運動場には化野たちの三人しか残っておらず、寂しい風景が広がっていた。

化野は、ボールが当たるくらいはどうでもいいと思った。けれど、この大会で力と出くわす確立は高い。ならばなるべく姿を見せずに行動するのが無難なわけで……いつそのこと、リタイアしてしまおうかと思う。

「どうする？ 俺たちは一応組んでることになるのか？」

「へ？ 組む？」

Fが化野に疑問をぶつけると、化野も疑問で返した。

「私賛成賛成！ 三人で組もうか！」

「よっしゃ、化野。勝ったぞ。俺たちは勝った」

「え？ そうなの？」

その時。Fが急に化野の手を引いた。転びそうになったが、足でそれを阻止したので転ばなかった。危ないだろ！と化野が怒ろうとしたが、背後でコンと大きな音が響く。

「だからさ、氣い抜くなよ」

化野が立っていた地面には、何かが落ちてきてきたような跡が

残っている。その近くには一つの野球ボール。

「へ？」

「へ？　じゃねえよ。俺がボールから逃がしてやったんだぞ？　化野君は礼も言えねえのか？」

「ああ、ありがとう……って、え？　どこから飛んで来たんだよ」

「私見たよーあっちだよ、校舎の三階あたりー」

「はあ！？　あそこから俺を狙ったのか！？　命中率やば！　良すぎ！」

化野は大きな声を出しながら、顔を青くしていた。

「現在の的は化野だろうな。桜美は当たらないって思うだろうし、俺は木の陰に隠れてるし」

「F先に言えよ！」

「きくたんバカー、きくたんバカー」

桜美は嬉しそうな顔で歌っていた。それに化野が気づくと、反論の言葉を並べた。

「きくたんって何だよ！　やめろ！　恥ずかしい！」

「きくたんバカー、きくたんバカー」

「桜美……！」

「はあ……そろそろ校舎入ろうぜ。桜美行くぞ、きくたんも早く」

「……！　Fきゅんの気持ちわかります」

「そうですか、きくたん」

冷静に言葉を吐いてるが、化野とFは恐ろしい顔で睨みあっていた。
「ふふ」

この場合は、桜美だけが楽しい空間だった。

■ ■ ■

もう……二人とも……。

一人の少女は一階にある教室の端の方に座っていた。少女は携帯を

持ちながら、困ったような顔をしている。その少女はボールに怯えていた。自分がいる教室にはいくつかのボールが落ちている。少女の手にもゴルフボールが握られていた。

「うぎゃ……怖」

その少女、猪本萩はボールに怯えている。どこかしていたらくるかわからないボールに。一緒にいた秋と沙紀は早くも当てられてしまい、脱落していた。頑張ってね！とメールがきたが、どう頑張ればいいのかわからない。

「さつきここに人いたよなー？」

「赤いツインテールの子だろ？」

「え！ それ猪本じゃね？」

「まじかよ、離れようぜ。勝てるわけがねえ」

廊下から複数の男の声がした。自分の名前が聞こえたことに猪本は驚くが、何もなかったように頭を伏せた。猪本がいた教室を男たちは通り過ぎていく。

勝てるわけがねえ。そうか、私はこの学校でも怖がられているのか。中学のときほどではないけれど、やっぱり私は恐怖なのか。恐怖イコール私。力を持つことは光栄なことなのに、なんで……なんで嫌な気持ちになるんだろ……やっぱり、私の力は……。

「泣いているんですか……？」

誰もいないはずの教室に声が響く。猪本は驚き、すぐに顔を上げた。

「あれ、泣いてなかったんですね」

そこには猪本が気になっっている男の顔に似た男の姿があった。

「覚えてますか？ ゼットアットと申しますが」

「覚えてるよ」

日光が当たっていないせいか、教室は暗かった。だけど、相手の

顔くらいは見えていた。

「この前は失礼なことをしてしまい、すみませんでした」

「……本当に拉致する気なかったんでしょ」

「ええ、その通りです」

会話は止まり、静かな空間になる。少し後にゼットアットが言葉を吐いた。

「僕と一緒に来ませんか？」

「……それってさ、よくある漫画の悪党の台詞じゃないの？ 私を騙して仲間にするみたいな」

「たしかに似ています。ですがそれとは違います。僕は悪党ではありません。神みたいな存在なんですよ」

「やっぱり悪党でしょ……」

猪本は呆れたような顔をした。

「僕のところにこれば、猪本さんを怖がる人はいません。逆ならあるかもしれません」

また、沈黙が続いた。

「仮登録とかじゃ駄目？ 体験みたいな」

猪本の言葉を聞いて、少し目を丸くしてからゼットアットは言葉を吐く。

「構いません」

そのとき、ゼットアットの笑顔が普段のと違うような、そんなことを猪本は思ったが、すぐに無視した。

「さあ」

ゼットアットが差し出した手に、猪本は優しく手を置いた。

：「正解Ⅱ勝利」二

「おいおい……どこに行ったんだよ……」

化野はそう呟き、校舎の外を歩いていた。

一緒にいた桜美とFは、人を追って行ってしまう、結果はぐれてしまった。仲間を失った化野の不安は大きくなっていった。

「あ」

運動場の逆のほうに歩きながら周りを見渡していると、木の影から人が出てきた。男だった。

「よっしや、つづす」

男はそう言つと、持っていたバスケットボールを当てる体勢になり、勢い良く投げつけた。

「あが！
ぎゃああ！」

化野は反射的に避けてしまった。すぐに当たっておけば良かったと後悔した。しかし、視覚がそれを忘れさせた。

化野の前にいた男の手が少し燃えていたのだ。

「え、え、あ……」

それが何なのか、今の化野には分からなかった。目を大きく開き、手足を震わせた。

「俺は炎を生み出せるんだぜ？ 痛い思いしなくなったら、大人しく当たりな」

ああああああああああああああああああああ
力、力、力！デアッテシマッタ！ホノオ！コワイコワイ……

チカラコワイカホノオニゲロニゲロニゲロニゲロニアア逃げろ！

化野の頭の中はカタカナで埋めつくされた。相手の言葉など化野には聞こえない。ただ男から離れることだけが頭を回り、気づいたときには全力で走っていた。炎を使う男は追ってきたが、少ししたら化野を見失って、追うのを止めた。

「はあ、は、はあ」

化野は、気づいたら運動場の端にまで走っていた。呼吸を整えながら周囲を確認する。もう大丈夫かと思うと、右耳の上あたりの髪をくるくると指で絡ませた。

力サ

背後から音。

「ひっ」

化野はすぐに背後を確認した

「あ！ ごめんね！ 大丈夫あてないよ！ あの…… 大丈夫？」
そこのは塩谷の姿があった。当てられないことよりも、危険な人物ではないことに安心した。

「あ、塩谷か。大丈夫…… びっくりした」

「大丈夫？ さっきの化野君すっごく怖がつてたけど……」

「はは、ボール当てられそうになってさ、それだけ」

それだけなんて嘘だった。塩谷の前で、化野は安心していった。けれど、炎の男の前では安心していなかった。力は怖くないと言った、それが嘘になってしまふ。そう嘘。まだ怖かった。

「化野君……」

塩谷には嘘は通じない。それは化野もよくわかっている。それから少し、無言が続いた。

「あれ、あれって萩ちゃん？」

塩谷は校門のほうを指差した。

「……そうっばいな」

「車？ 早退かな？」

「一緒にいるやつ誰だよ」

「親じゃない？」

「えー、よく見えないけど親じゃねーだろ。若そう」

「じゃあ……お兄さんかな」

「兄ちゃんいたんだ。たしかにいそう」

それから化野は深く息を吸って、

「萩ー！ 早退かー？」

と、叫んだ。声が学校中に響く。

そうすると猪本は素早く振り向いた。少しの間が終わると猪本は声を吐く。

「うん！ ……ばいばい！」

声ははつきり聞こえたが、表情は遠すぎて見えない。兄らしき人と猪本は黒い車に乗り、扉を閉めた。

「きゃあああああああ！」

塩谷が悲鳴を上げて崩れ落ちた。隣にいた化野は、驚いて体を揺らした。

「おい！大丈夫か！？」

■ ■ ■

何なのこれありえない！ありえない！嘘でしょ……

「きゃああああ、うつつあー！」

「おい！ どうしたんだよ！ 頭痛いのか？」
塩谷は、頭を抱えながら地面に倒れていた。

誰誰誰！誰なの！？誰、後ろ？

「あああ、殺気！ さっき…」

「は！？ 殺気？ あ、お前の力か……猪本か！？」
「違う！」

後ろ……校舎！いつも教室で感じる殺気とは比べ物にならない！そんな殺気誰が……

「えっと……どうすれば……」

塩谷には化野の言葉はもう聞こえなかった。

校舎……あそこ……？

塩谷は薄く開いた目で、校舎最上階にある部屋の窓を見た。

校長室？

■ ■ ■

「校長、塩谷が苦しんでいます」

と、札素火は窓から外を見ながら言った。

「この気持ちを抑えるのには無理がある。君が僕の立場になったら、よくわかると思うよ」

きぐるみを被った男も窓の外を見ながら言った。

「これまでの貴方なら、こんなことで怒ることはなかったのに」

「言っただじゃないか。今回は特別なんだ。僕の人生で一番の山なんだよ」

「貴方の人生の山が今なら……俺の人生の山も今になるんですが」
「早く」

校長は、札素火の言葉を見殺して、左手で猪本が消えた場所を示した。

「はいはい」

札素火はいつも通りの返事の仕方だった。だけど、いつもより真面目な返事だ。校長の表情は、被っているきぐるみによって見えなかった。しかし、機嫌が悪いのは誰にでもわかる。

札素火が素早く校長室を出た。

「くそ……どこから入りやがった……ゼットアット」

校長は強く強く、殺気を放った。強く強く。

誰かのために。

：「正解」勝利」三

球技大会も終わりに近づいていた。化野は運良く、まだ競技中だった。

「はあ……」

化野はため息を吐いた。

「うりゃ」

「きやははははは！」

化野はまた、ため息を吐き、鹿乃と一緒に座り込んでいた。Fと桜美は何かに夢中なようだった。ここは運動場の真ん中だ。

「なんかこれ、反則じゃね？」

「頼もしいですね」

化野が呆れながら言った言葉に、鹿乃は笑顔で答えた。

「そおい！」

「きやはははは！ふうー、お腹痛い！」

運動場の真ん中に四人の影。今一番危険なところにいるはずなのに、四人はずっとそこにいた。

化野と鹿乃を守るように、その周りにはFと桜美が立っていた。当然、今は球技大会なので、四方八方からボールが飛んできていた。そのボールをまるで蚊でも追い払うように、バットでボールを跳ね返しているFと、敵の居場所を発見次第、罠の餌食にしている桜美がいた。

その光景に呆れていたのは化野だけだった。

「ん？ あーあーこれ聞こえてるの？ 大丈夫？ はい皆ー！ あと十五分で球技大会終わりだよー！」

校長の声が学校の放送で響いた。

「おい、もう敵いないんだけど」

「私がほとんど罷にはめたでやんす！」

Fと桜美は退屈そうにしていた。

「F、桜美。もう俺らしか残ってねーよ」

「嬉しいですね、勝ったんですよ」

化野はまた、呆れていた。横にいる鹿乃はニコニコと笑って、嬉しそうにしていた。

球技大会は終わった。化野は怖い思いをしたので、終わった後は大人しく家に帰った。

勝ったら良いことがあると言っていたが、敗者は掃除、勝者は掃除免除という、どうでも良い幸福だった。

■ ■ ■

「これから仲良くしてくださいね。萩さん」

「うん」

猪本萩は無表情で返事をした。そして長い廊下を歩きながら周りを見渡していた。

「こちらの一室、萩さんの部屋になります。自由に使ってくれて構いません。使用は強制ではありませんので、家に帰られても良いですよ。」

「うん」

ゼットアットに着いてきたところは和風な豪邸だった。

「あんた……一人暮らし？」

「まさか。他にも住んでいる人はたくさんいますよ」

たしかに、耳を澄ますと足音や声が聞こえていた。

「では、用がありますので、俺は失礼いたしますね。この屋敷の見学は許可しますが、人に会ったときには常に敬語であるようにお気をつけください」

ゼットアットは優しく笑った。

「え、うん」

猪本は適当な返事をした。常に敬語であることに疑問に思ったが、深くは考えなかった。

「け、い、ご？ 敬語？ ございます？ 茶野にも敬語？ 茶野偉い？」

急に、ゼットアットの背後から小柄な少女が現れた。小学生の低学年といったところだろう。会話に疑問が多いのが目立つ。

「茶野、君は萩さんと仲良くしてやってよ。困らせることはしたら駄目ですよ」

ゼットアットは茶野の頭を撫でながらそう言った。

「敬語なし？ 仲良し？ 親友？ わかったよ？」

茶野は楽しそうに話を進めていた。猪本はそれを、不思議そうに見ていた。

「では、さようなら」

ゼットアットは部屋を出た。

「茶野知ってるよ？ 萩って馬鹿な子でしょ？」

「え、馬鹿って何よ……」

初対面にも関わらず、馬鹿と言われたことに猪本は少し苛立ったが、子供だから仕方がないと思い、諦めた。

「力、光栄って言ったんでしょ？ 馬鹿だね、力は嫌なことだよ？ なのに光栄なの？ なら、力をくれたゼットアットに感謝しなくちゃね。ね？」

茶野は顔を少し傾けて笑った。

猪本は聞こえてきた言葉に意味を理解しようとした。ハテナだらけの言葉でも、意味を理解することは難点ではなかった。そう、その意味はすぐにわかる。

「……ゼットアットがくれた？」

自分自身の謎。仲が良かった仲間の謎。
その謎は簡単に崩れた。

■ ■ ■

コンコンと、音が響いた。校長室の扉を打つ音だった。

「うお？ 待つて待つて！ 今きぐるみ被るから！」

校長はソファーから起きて、慌ててきぐるみを被った。

「えっと、いいですか？」

扉の向こうから、弱い女の声の音が聞こえる。

「お、この声は鹿野ちゃんだね？ いいよーどうぞー」

校長室の扉がゆっくり開いた。

「失礼します」

「ん。どうした？」

鹿野は真剣な顔をしていた。いつもの優しい顔からは想像できない。

「あの、私の力、ご存知ですよ」

「うん。知ってるよ」

校長は鹿野の質問に素早く答えた。

「それが、どうかしたの？」

校長はソファーに寝転びながら顔を上げる。顔を上げて、気ぐるみで表情は分からなかった。鹿野は出入り口の前で立ったままだった。

「昨日の、球技大会中、ものすごい殺気を感じました。今まで感じた中で一番強い殺気です」

鹿野の手は強く握られていた。

「あの殺気は……校長先生のですよね……」
汗が垂れた。

「うーん。多分僕のかな？」

「え」

あっさり答えが返ってきたことに鹿野は驚いた。

「あんな殺気、普通有り得ないです。貴方は只の校長先生じゃないですか！あんなの……」

鹿野は視線を下に向けた。

「殺気に普通があるの？　ちよつと、嫌いな人のことを思ってただけだよ。鹿野ちゃんだって、嫌いな人くらいいるでしょ？」

「でも……」

「もし、不快な思いをさせちゃったら謝るよ。ごめんね」

校長はソファアーの上で正座をした。

「いえ、少し気になったただけなので……では、失礼します！」

鹿野は逃げるように校長室を出て行った。

「皆、嫌いな人くらいいるじゃん」

きぐるみが落ちた。

■ ■ ■

そうだよ。普通じゃないの！嫌いな人くらい私にだっている！それはきつと皆もそうよ。だけど、だけど、あの殺気はそんなじゃない！クラスにいる苦手な人に向けるような、嫌いな人に向けるような、そんな嫌いじゃないの！殺気というものは、大きくても、小さくても”殺気”なのよ。殺したいと思うことなの。あれをあんな強さで、大きさで。あんなの……普通に生きている人が出す殺気じゃない……！誰かに話しよう、私一人で考えるよりいいわ。化野君は自分のことで精一杯なようだし、桜美ちゃんは校長先生を気に入っているようだから……F君……F君に話しよう。

鹿野は小走りで廊下を走った。

鹿野はそのとき、ずっと前から思っていたことを思いだした。

”校長はなぜ、この学校を作った？”

私のような力のある人を集めた学校。そんな学校に無力な人が校長を勤めることができるのか。

今まで何回も、校長の力の有無について考えた。あっても可笑しくはない。今、力は誰にでもランダムに与えられている。人数は少ないけど、決まってこんな人に力が与えられるなど、ルールはない。校長先生が力を持っていないことはまだ分からない。それは私の力で分かることではない。

私は校長先生を信じれない……！

鹿野には心配なことが二つあった。校長のことで、自分の教室に微かに感じる殺気ことだった。

人間には絶対に感情があつて、それを隠すことが多い。けれど、隠すことは、鹿野にはまったく意味のないことである。鹿野は、もしかしたら私の力が最強かもしれない。と、心で思ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9597r/>

HITOFUDA - ヒトフダ -

2011年7月21日03時22分発行